

平成二十七年 度

高山市近代文学館調査・研究報告書

平成二十八年三月

一般社団法人 高山市文化協会

序

一般社団法人 高山市文化協会は、高山市から委託を受けて、郷土に係わりのある文学作品を収集・調査して、作者の功績とともに「高山市近代文学館調査・研究報告書」にまとめ、市民の皆様にご紹介しています。

平成二十七年度は、大正・昭和の時代に、社会教育の先駆者として上宝地区を中心に活動し、飛騨の地域にも大きな影響を与えた「篠原無然」の文学作品を調査しました。特に「飛騨青年の叫び」は代表作ともいえるもので、今日においても飛騨の各地で愛唱されています。

また、明治・大正・昭和に至るまで活躍された、法学博士「牧野英一博士・良三博士」の兄弟は、高山市名誉市民であるとともに和歌にも通じておられ、多くの作品が残されています。特に「牧野英一博士」は「佐々木信綱」の門下にあって、昭和三十三年新年御歌会始には召人を務められました。

高山市文化協会はこれからも、高山市の文学をはじめ文化の向上のために、引き続き調査・研究を続けてまいります。

平成二十八年三月

一般社団法人 高山市文化協会

「目次」

篠原無然 く飛驒青年の叫びく

篠原無然 年譜

一 写真「顔写真」なには病院勤務の頃	2
二 写真「篠原無然記念館」	3
三 写真 歌碑「若き日を山に果てなむ」	3
四 写真「篠原無然遭難の碑」安房峠途中	4
五 掛軸「小事は忠に 大事は忠に」	4
六 掛軸「無然の歌」太郎氏の筆	5
七 掛軸「無然の歌」太郎氏の筆	5
八 著書「容貌と人格」大正二年一月出版	5
九 著書「青年の光輝（歌集）」大正四年十一月出版	6
十 著書「日本アルプス物語」遺稿集	6
十一 著書「山の愛」遺稿集	6
十二 著書「山上浄土」遺稿集	6
十三 文集「無然文集」修養団機関誌（向上誌掲載）	7
十四 書籍「著書出版計画」（和歌と絵）	7
十五 書籍「白雲集」	7
和歌「百鳥啼き頻く」 二十二首	7
和歌「生白樺を割りて焚く」 十二首	8
和歌「山荒れて鳴り轟く」 十二首	8
和歌「白雲霽る、」 三十首	8
和歌「星夜逍遙」 十三首	9
和歌「生命かけ生くるよろこび」 四十五首	9
和歌「びろうどの素肌」 二十五首	10
和歌「蝶」 十六首	11
和歌「山下の友をばげまして」 八首	11
和歌「星の花」 十一首	11
和歌「花のかほり」 十三首	11
和歌「山に祈る」一首	12
十六 綴り「志らかば」詩歌集	12

詩歌「青年団々歌」	12
詩歌「青年の意気」	13
詩歌「労働の歌」	13
詩歌「飛驒青年の叫び」	13
詩歌「飛驒の血のいろ」	14
詩歌「郷土の美」	15
詩歌「青春経」	16
十七 綴り「工女いとしや」	17
詩歌「故郷の諸声」	17
詩歌「私は紅女」	18
詩歌「工女組合の歌」 和楽の歌	19
詩歌「製糸工女のために」 都々逸	19
十八 綴り「貞操の光」詩歌集	20
詩歌「処女会の歌」	20
詩歌「処女の思い出」	20
詩歌「賤の女の四季」	20
詩歌「人類共存の歌」	21
詩歌「わたしのは、さま」	21
詩歌「覚悟の歌」	22
十九 綴り「大阪府立難波病院に関する書類」	22
詩歌「涙の歌」	22
詩歌「はすの花よ」	23
詩歌「売られた花よ」	23
二〇 遺稿「山のおたより」	24
詩歌「新生の歌」	24
詩歌「人のこゝろえ」	24
詩歌「数へ歌 農夫の幸福」	25
二一 遺稿集「飛驒と無然」	26
「人の生き甲斐」	26
「人間の花と蜜」	26

「人類共存」	26
「苦勞人」	26
「娑婆の味」	27
「アカヌケした人」	27
「眞実の人間学問」	27
「味のある人」	27
「姿」	28
「苦悩の福」	28
「お大切に」	28
「愛の花と歌」	28
「真心こめて」	29
「生き甲斐」	29

歌人・高山市名誉市民 牧野英一博士・良三博士兄弟

牧野英一年譜

一 肖像画「高山市名誉市民 牧野英一」	32
二 掛軸・原稿用紙「はたらいて・・・英一」	33
三 掛軸・短冊「うちもたし・・・英一」	33
四 掛軸・短冊「月見草・・・英一」	34
五 掛軸「風とほし・・・英一」	34
六 掛軸・短冊「しら雲は・・・英一」	34
七 掛軸「春来る・・・英一」	35
八 掛軸「啼きつとは・・・英一」	35
九 掛軸「こほろきが・・・英一」	35
十 掛軸「霜しろし・・・英一」	35
十一 掛軸「すゞかけの・・・英一」	36
十二 掛軸「みちはたの・・・英一」	36
十三 掛軸「寒樹・・・英一」	36
十四 額装「早しほの・・・英一」	37
十五 額装・書「大いなりや 英一」	37
十六 森 宛て書状（受賞の喜びを歌っている）	37
十七 福田タ咲宛て書状（文芸誌の記事から、歌を詠んでいる）	38
十八 一文字笠「明け六の・・・英一」	38
十九 額装・一文字笠「谷々を・・・英一」	39
二〇 額装「かせとほし・・・英一」	39
二一 歌碑・写真「かせとほし・・・英一」	40
二二 扇子「仁遠からんや 英一」	40
二三 扁額「仁遠からんや 英一」	40
二四 扁額「江名子田蓑祖源十郎翁之碑 牧野英一」	41
二五 歌碑・写真「江名子田蓑祖源十郎翁之碑 牧野英一」	41
二六 箱書「表書 折々廻歌」	42
二七 一文字笠「まつはらの・・・英一」	42
二八 版画「明け六の・・・牧野英一」	43
二九 版画「枕の下・・・牧野英一」	43

三〇	版画「何故のこと・・・牧野英一」	43
三一	和本『松室岡』牧野英一稿大秀伝記	43
三二	冊子「牧野英一歌集」	44
三三	冊子「海を渡りて 野を渡りて」	44
三四	冊子「飛騨短歌」	45
三五	冊子「あかしや」	45
三六	冊子「小盞集」	45
三七	冊子「パンテオンの人人」	45
三八	冊子「理窟物語」	46
三九	牧野博士歌はがき 八枚	46
四〇	写真「牧野英一・良三兄弟」	47

牧野良三年譜

四一	肖像画「高山市名誉市民 牧野良三」	48
四二	扁額「青松壽色多 飛州」	49
四三	掛軸「みなかみに・・・良三」	50
四四	掛軸「恋をする・・・良」	50
四五	掛軸「たまくしけ・・・良」	50
四六	掛軸「手まくらに・・・良」	51
四七	掛軸「なまぬるき・・・良三」	51
四八	掛軸「えんかわに・・・良」	51
四九	掛軸「飛騨の山・・・良三」	51
五〇	掛軸「とび石を・・・良」	52
五一	掛軸「とりたて、・・・良三」	52
五二	扁額「ちとり鳴く・・・良三」	53
五三	掛軸・扇面「く羅み山・・・良」	53
五四	掛軸「小とり鳴く・・・良三」	54
五五	「和気満堂」 昭和丙申 法相 牧野良三書	54
五六	扁額「Strong・・・R Mokino」	55
五七	写真「牧野英一・良三宅」記念プレート	55
五八	六二 屏風・書、短冊、扇面など	55

五八	屏風貼・書「なまぬるき・・・良三」	56
五九	屏風貼・短冊「たそがれや・・・英一」	56
六〇	屏風貼・短冊「朝萩 きぬきぬの・・・純男」	56
六一	屏風貼・扇面「美しめ・・・英一」	56
六二	屏風貼・書「ふる雨を・・・良三」	57
六三	一文字笠「しつとりと・・・良三」	57
六四	福田夕咲宛て書状	58

篠原無然

ゝ飛驒青年の叫びゝ

＜篠原無然(禄次)年譜＞

明治22年 3月	兵庫県美方郡西浜村諸寄 篠原六一氏の長男に生る
〃 27年	6才、母と妹を亡う
〃 28年	リウマチスにて瀕死の大病に罹る
〃 36年 3月	高等小学校卒業、貿易商会に勤務
〃 37年 4月	県立神戸商業学校に入学
〃 40年 7月	過労のすえ心臓を患い臥床する
〃 41年 4月	病癒えず退学、帰郷し闘病生活に専念
〃 42年 4月	美方郡小代小学校に奉職。勤務のかたわら地域の指導育成につくす
〃 44年 4月	立志上京、日本力行会幹事となる。早稲田大学文学部哲学科に入学
〃 45年 7月	東京朝日新聞社嘱託として、群馬、福島、新潟、長野県下を73日間に渉り90余町村の講演旅行をなす
大正 2年 3月	修養団に入団し編集部主任となる
〃 2年 7月	利根水源の幽境尾瀬沼に入り独棲
〃 3年 4月	入山を決意し、父母に離別のため帰省して父の許しを得る
〃 3年 8月	岐阜県上宝村第一小学校に奉職す
〃 5年 4月	自ら望み全村平湯分教場へ転任す
〃 8年 3月	研究、修養に専念のため教職を退く
〃 〃 秋	平湯青年会館新築、階上を先生の居室と定め、「靈泉然莊」と号し、「やはらぎのその」と称す
〃 9年12月	大阪府嘱託として社会事業を研究
〃 10年11月	東京都嘱託となり社会事業を研究
〃 12年12月	大阪府嘱託としてなには病院に勤務。入院患者の訓育に当る
〃 13年10月	なには病院を辞して上京、著作発刊の準備をなす
〃 13年11月	東京出発帰山の途につく
〃 〃 〃	14日、安房峠を越して平湯に向う途中、積雪と吹雪のため遭難、逝去する
〃 〃 〃	19日、平湯区民葬執行

＜歿後の年譜＞

昭和 2年10月	岐阜県吉城郡上宝村平湯「靈泉然莊」跡に篠原無然記念碑建立、題字 床次竹次郎氏揮毫
〃 4年 8月	兵庫県美方郡小代村に、篠原無然記念碑を井上富太郎他有志建立
〃 6年11月	歌集『こころの友』(45頁)発刊、今田勝躬編集、平湯青年団(田中誠一)発行
〃 31年10月	追想録『飛驒と無然』(300頁)発刊、今田勝躬編集、平湯篠原会発行
〃 35年 6月	遭難の地安房峠に、篠原無然肖像記念石碑を平湯篠原会建立、題字 修養団主幹蓮沼門三氏揮毫
〃 36年10月	平湯篠原会に「篠原文庫」設置。著書、遺稿、文書並びに遺品数十点を収める、実弟篠原太郎氏寄贈
〃 〃 11月	菩薩界総司所より「勒瑞菩薩」(ろくずいぼさつ)の法号を拝受
〃 37年10月	平湯湯の平の地に「菩薩堂」を建立、名木一位(あららぎ)の大樹に勒瑞菩薩像を彫像して本尊とす 小冊子『飛驒と無然』一人の生き甲斐—(20頁)を3,000部発行、広く頒布する、今田勝躬氏寄贈
〃 45年11月	篠原先生遺品が「上宝村文化財」として、また書類原稿等が「上宝村重要書類」として篠原文庫に収蔵保管される
〃 47年 5月	勒瑞菩薩『篠原無然小伝』刊行、著者今田勝躬、発行平湯篠原会
〃 〃	平湯に文化財保存の鉄筋耐火構造の宝庫を建設し、円空仏とともに勒瑞菩薩関係遺品を収蔵する

一 写真「顔写真」なには病院勤務の頃

(篠原無然記念館蔵)



二 写真「篠原無然記念館」

(2015年8月撮影)



三 写真 歌碑「若き日を山に果てなむ…」



(2015年8月撮影)

平湯温泉バス停から、国道一五八号「安房峠」の登り口の右側に「安房民俗館」があり、道路側沿いにこの碑が建てられている。昭和四十八年十月、篠原無然の五十回忌にあたり、篠原会が建てた。

碑の右側面には『やわらぎのそのあるじ住居跡』と刻まれている。篠原無然が作詞した「飛騨青年の叫び」の歌詞を刻んだ碑を、平湯民謡保存会が昭和五十五年、平湯温泉バス停留所前の平湯温泉総合案内所脇に設置している。作家、江夏美好氏は、篠原無然を「雪の碑（いしづみ）」によって作品化している。これが江夏美好氏の遺作となった。

四 写真 「篠原無然遭難の碑」 安房峠途中



(2015年8月撮影)

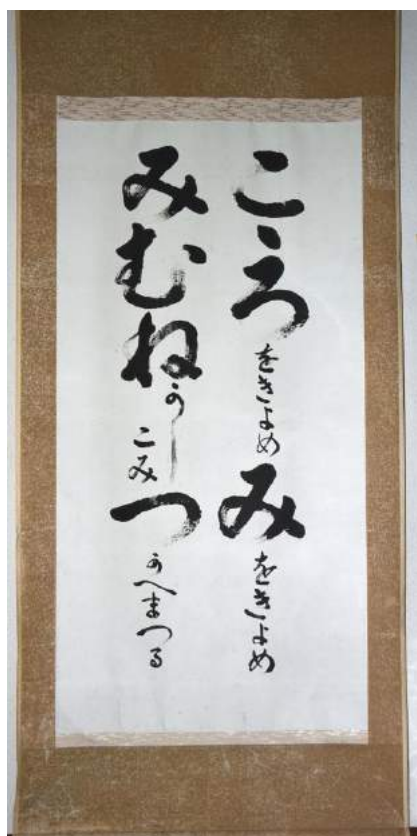
五 掛軸「小事は忠に 大事は忠に…」



(個人蔵)

六 掛軸「無然の歌」太郎氏の筆

掛軸 「こころをきよめ みをきよめ…」



(個人蔵)

七 掛軸「無然の歌」太郎氏の筆

掛軸 飛驒青年の叫び 「あ、偉なるかな飛驒の山…」



(個人蔵)

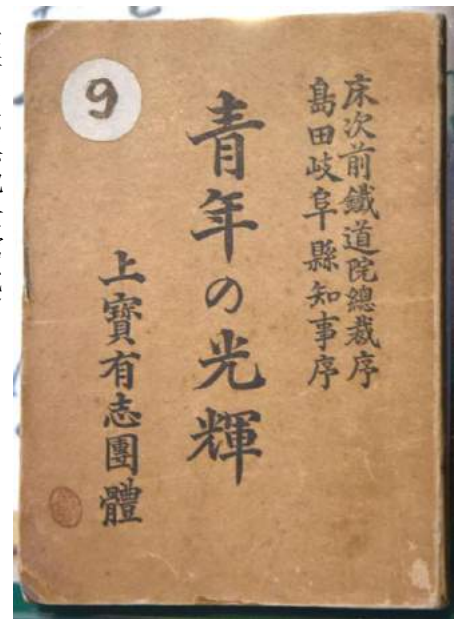
山本秀陽筆

八 著書「容貌と人格」大正二年一月出版



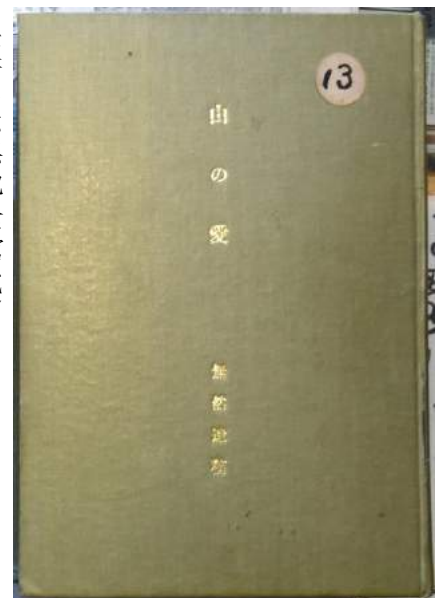
(篠原無然記念館蔵)

九 著書「青年の光輝（歌集）」大正四年十一月出版



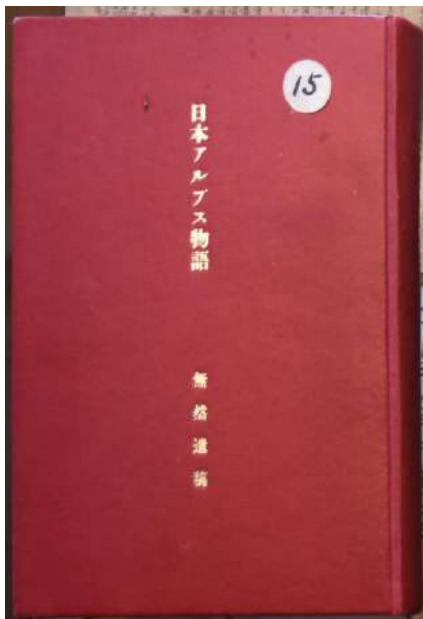
（篠原無然記念館蔵）

十一 著書「山の愛」遺稿集



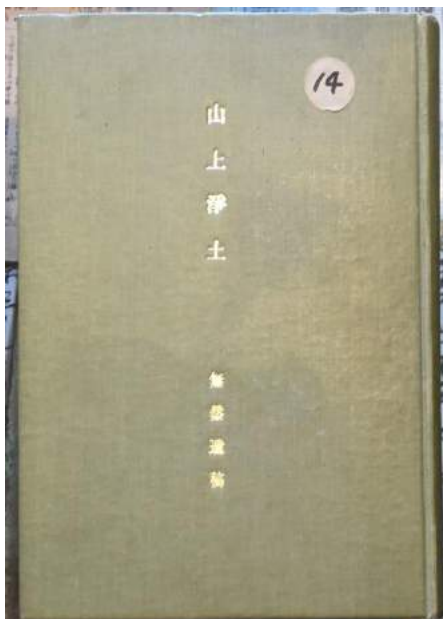
（篠原無然記念館蔵）

十 著書「日本アルプス物語」遺稿集



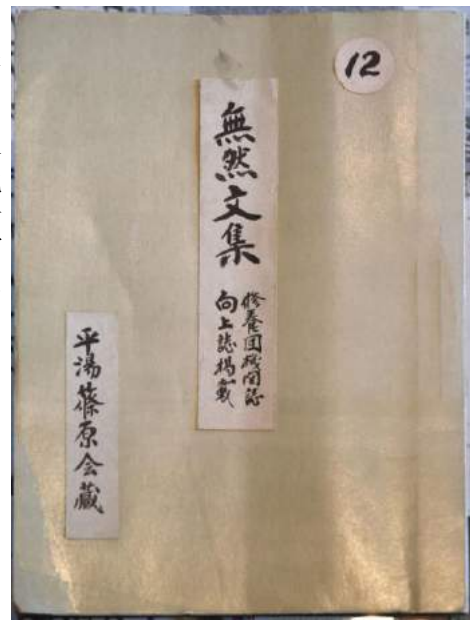
（篠原無然記念館蔵）

十二 著書「山上浄土」遺稿集



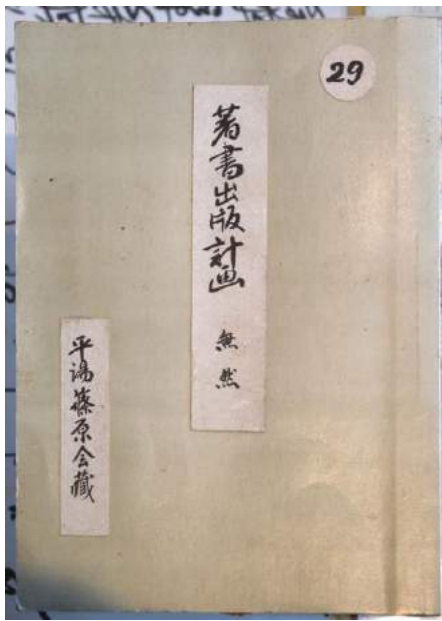
（篠原無然記念館蔵）

十三 文集「無然文集」修養団機関誌(向上誌掲載)



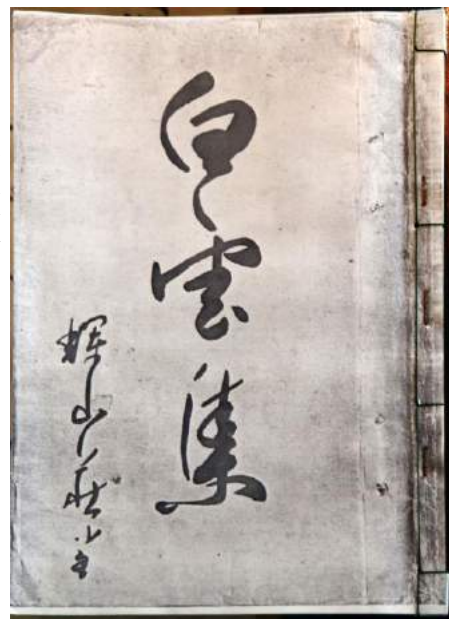
(篠原無然記念館蔵)

十四 書籍「著書出版計画」(和歌と絵)



(篠原無然記念館蔵)

十五 書籍「白雲集」



(篠原無然記念館蔵)

和歌「百鳥啼き頻く」 二十二首

初朝

山莊の小窓に炎ゆる旭光をまばゆく浴びて黙想に入る

残雪多く風寒し

山莊の曉風寒しふるひ啼く時鳥の音身にしみ渡る

窓に来て何を告ぐる時鳥^{いづ}庇へしやればいよいよ啼き頻く

胸裂くる計りに語るほととぎすほゝゑみて聞く我よろしきや

雨の朝

雨になやむ鶯一羽山莊の軒端に憩ひ啼く音の哀れ

山莊前の小樹尖端に

鶯来て常に啼き頻く

啼き死ぬる外に望のなき如く終日歌ふ鶯うれし

命かけて^{そらみ}終身ふるはせ天地に聞こえ渡れと啼く鶯よ

雨降り初め時々雲の切れ間に日光を仰ぐも多くは白雲
とぞし山下は見えず雨降りつゞくこと約半月にわたる

山上の深夜の霧を浮き出でて黒く聳ゆる老樹高し

ひねもす

白雲の中に終日まどろみて母の御肌に融くる法悦

霧はれて窓辺に躍る日の光小胸の調べ（音）ふるひ高鳴る

蕭々と雨降る夜半に山荘の夢あたたかし御恵を得て

白雲に包まれ居れば三千の世界いみじく我がうちに満つ

寂靜に浸りて安き我が心友を思ひて又も乱るゝ

友なくば此の三昧に酔ひ死なむ人の生き甲斐我を許さず

法悦に和らぐ小胸澄みゆきて狂へる友をうつすぞ悲し

しとくど熊笹原に五月雨れて今日も暮れぬる山の静けさ

さみだ

しづくと山荘の窓打つ雨に久遠の空の偲ばるゝかな

山荘の深夜に燃ゆる爐火の色わが炎ゆる血のうつろひなるか

濛々と曇りみ晴るゝ雲の中万尺の山黙して聳ゆる

たゞ白し明るき雲の中にあり涅槃の夢を見る心地して

白雲の深み遙に鶯の啼く音いみじくさる渡るかも

朗らかに啼く音のうれし鶯の谷渡りゆく新緑の朝

和歌「生白樺を割りて焚」 十二首

みきやう

白雲の底ひ遙かにとうとうと流転の御経響く尊し

我が息に驚かれぬる山上の雲深き日の長き閑けさ

若人の肌にも似たる白樺の燃ゆる力のはげしさはよし

斧うてば白き若肌裂くる如白樺の幹香りて倒る

白樺の肌はうるはし若人の燃ゆる命のあふるゝが如

白樺の燃ゆる響のさる渡る山荘の夜の爐火の紅さよ

白樺の甘き香の漂へる山荘の朝時鳥啼く

蕭々と山上の雨今日四日病めるが如く時鳥啼く

一念に三千世界輝ける此の法悦を分たばや君

薄雲のかそかに映す深山よし老樹林の果て知れずして

里より青年訪れくる

たより

里人の音信はうれし数々の品山荘を賑はしにけり

六月の半に咲ける山上のつゞきの色の美しきかな

和歌「山荒れて鳴り轟く」 十二首

まなこ

天地も裂けむはかりの山鳴りに眼は眠れど耳は眠らず

夜もすがらどよみどよみし山鳴りの息みて暁眠に入りぬ

山鳴つゞきて息まず

凄まじき大山鳴に天地は今滅びむと覚ゆるばかり

山鳴りは真昼になれど息む間もなし小鳥の歌の絶えぬる凄さ

山荘は飛ばむ巨木折れなむ山鳴りを静かに聞ける心尊し

阿修羅王の叫びもかくや山ふるひ濃霧を捲いて狂ふ風の音

万尺の衣裂く如く逆巻ける怒濤寄する如山鳴らす暴風

ごうくと山ふるはせて風迫る巨幹折れなむ山荘は終らむ

夜は凄く昼なほ凄き山鳴りに鍛へられゆく我が心強し

二昼夜の山鳴り息みて鶯のはがらかに啼く今朝の閑けさ

又山荒れ出す遂に五日

五昼夜の山荒れなきて日の光仰ぐ喜よ総身に躍る

五昼夜をつゝむ霧海今朝も霽れず山上の独居いと長きかも

和歌「白雲霽るゝ」 三十首

連日の白雲霽れて久々に山下を瞰れば花盛りけり

原人の偲はるゝかな赤裸汗も拭はで薪割りつゝ

旬日の白雲晴れて万尺の山近う聳ゆなつかしきかな

あま 天鉾の聳ゆる如し槍ヶ岳盟主の栄誉厳かにして

穂の如くみ空に聳ゆ穂高岳不動の教説くが如くに

荒れ狂ひし風雨の名残跡もなし硫黄ヶ岳の噴煙長閑に

けむりのどか 東へは晴れの予報と定まれる硫黄の噴煙なびくはうれし

梅の葉の壁一重して鶯の啼く音の耳をうつはげしさよ

山莊の爐中に生ひし若竹の日に延びゆくを見れば淋しも
ふと見れば爐の東隅に寸余なる若の芽二つ生ひ育ち居り

訪れし青年何心なく話しながら若草を摘む

心なき青年の爲摘まれたる爐中の若草可愛し淋しも

予報する夕の雲の真白さに明日の樂しみ描きてほゝゑむ

穂高岳めぐる積雲やはらかく晴れ前知らす夕のしずか

やけだけ

硫黄岳の吐く白煙長らかに前知らす晴れ明日の待たるゝ

蓬萊の山見る如し純白の雲に浮べる新緑の岳

やま

澎湃と天打つ雲の浪わけて黙する高峯巨人の如し

純白の浮雲よろし渦巻くも流るゝもあり沸き立つもあり

純白の雲の表に描かれし青稷原の美しきかな

やはらかき白樺原の新緑の白雲うけていよゝ炎え立つ

薄紅の夕雲負ひて聳え立つ万尺の山のはぢらひはよし

ひととき

一片れのかゝると親しに山一つおほひ隠しぬ雲の偉いさ

夕焼の空に聳ゆる大山の恥らひはよし霧そと被りて

白雲のブエール脱ぎて現はれし美しき峯雪を含める

おおい

偉大なり小さく溪に湧く霧の數里の雲に化する山境

山上の夜半寂かなり地にかへる霧のしづく音しめやかにして

すがた

この心磨きに磨き世の相限りなきまでうつし見むかな

生命の凝り輝ける我が心大父母の恵なつかし

ちちはは

大父母の親示こそは我が心孝子の幸のこひ願はるゝ

大父母の親示拝し慎ましく涙湧くまで勤めくらさむ

大父母のみ心の中に浸り死ぬ愛子の幸は我が生命なれ

和歌「星夜逍遙」 十三首

限りなき空の星のまたゝきをなつかしみつゝ夜を更かしぬる
無声にて物語らむと仰ぎ見る星の心の沁み渡る夜半

あゝ星よ汝も限り有る身なり大父母のみ子どもなれば
睡まじく分に徹して物語る子等の生活を母賞で給ふ
腐り物の眼にはうつらざ芳香の中に起き臥す山の静けさ

みにく

雲上の聖き心は醜かる我が形をば忘れしむるか

瓢々と風山莊に満ちければ雨来るらしと薪取入る

瓢々と雨風満ちて爐火あふる稷の燃え火の紅か白きかな

硫黄岳の煙怪しく乱れたる雨近き夕の山莊淋し

暴れ模様を前知らすなる焼岳の煙の乱れ悶ゆる如し

悶へ狂ふ如く乱るゝ焼岳の煙に友の偲ばれて悲し

泣き狂ふ友を慰め得る力子へられなば死もよろこばし

鸞の啼き死ぬ如く道の爲叫びて死なむ願きかれむ

和歌「生命かけ生くるよろこび」 四十五首

よろこび

生命かけ生くる歡喜我に満て勇みて死なむ力溢れよ

努めても努め足らざる我が心懺悔に生れ懺悔に死なむ

限りなきみ世に限りて生くる子の生命は懺悔の呼吸にこそあれ

さみだれ

雲浮かぬ梅雨空にうす霞み聳ゆる雪山神々しけれ

さまよ

霧暗を逍遙ひ入れば山莊の消え残る爐火の紅き沈黙

谷水の音もかそかに霧こむる山上の夕の里のまたたき

山上の夜霧の中に佇める白衣を照らす淡き星影

莊嚴の夕陽を浴びて涙湧くあゝ此の生命惜しからめやも

有限の我を献げて限りなき生命の栄え祈らるゝかな

いと小さき総身ふるはせ限りなき空に叫べる鳥の信行

響き渡る音に限りのあるならむ生命の響限りあらめや

現し世に輝く信行生活は限りなき世の光り初めなり

いと小さき信行なれど限りなき生命の光果てしあらめや

果てしなき生命の世まで輝くと信行に生くる無限の法悦

生命がけ努めし我をあはれみのみ親心はゆるしたまはむ

及ばぬを焦るは分にもとるらむ生命をかけてみ恵をまて

風はげしき雨の乱れに窓観ればゆるゝ景裏に美しき花咲けり
 風雨に雲霧乱れ山鳴れど鶯啼けり自由の信行
 雞境もなるれば心安けし山鳴る中に歌ふ鶯
 雞境を榮達の機縁と観じつゝ勇みて生命かくる信行
 山上の月傾きて霧こむる櫻の林にはの白く照る
 旬日の梅雨にしめりし山莊のところ（う）にすゝの子生ひつ
 雨に暮るゝ山莊の二旬過ぎむとす爐辺の若草五寸のびたり
 斯ばかりに生きとし生ける物恋し人恋ひしさに炎ゆる心よ
 星影のはゝゑみに沸く血しは波声のたより身をふるはせつ
 恋ひ恋ふる人の世の友はゝゑます我が小さき力ふるはむの希望
 滝つせと流るゝ友の白涙を拭はむ衣織らむの祈願
 赤裸なる我をみむねに委せまつりすべてを捨てゝ友をいだかむ
 いと小さき我を忘れて限りなき友の涙にとくるよろこび
 苦しめる友を懷きて我が幸を身にしめにけり生命をかけて
 雨あがり山狭つゝむ白雲のその真白さに我を忘れつ
 しめやかに雨あがりゆく山狭を馳せゆく雲の純白の色
 純白の雲の清さにたえかねて心おどけぬ神々しくも
 まざりなき雲の白さよ渡り来る風かほるなり若葉の山に
 啼き啼きて我近よるを知らず啼く鶯の口血を吐く如し
 紅き口裂けむばかりに開きつゝひた啼きに啼く鶯いと
 山莊の雨後の夕の静けさに藥罐に沸る湯の音高まり
 はとくゝと雨しづく垂る山莊の夕は長し日は暮れずして
 霽れつ降り降りては霽れつ山上の梅雨の夕は夢見る如し
 老梅の小ゆるぎもせで蕭々と雨ふりつづく山の沈黙
 雲深く旬日を経て里を見ず山上の詩趣（たけなわ）閑なれど
 梅雨なれば雨ふりつゞき半月余雲の世界に住む心地しつ
 爐の中に育つすゝの子白露の玉をつらぬる山莊の朝
 鮮緑の熊笹原よ白雲よ紺青の山よ碧琉璃の空よ
 白雲の奥深く聳ゆるアルプスは久遠の果に連なるらしも

和歌「びろうどの素肌」 二十五首

蜃気楼眺むる如し白雲の遠見に幻滅す飛驒の連峰
 天軍を迎えて立てる勇士にも似るアルプスは動き初めけん
 大帝の奉迎（むかへ）の先手ゆく如し万尺の山聳え連る
 びらうどの素肌にまとふ雪衣ちぎれ（ゆあ）て岳も夏来ぬ
 梅雨晴れの浴み姿のアルプよしびらうど色のたくましき肌
 白滝の舞ひ昇るごとし梅雨晴れの空に聳ゆる噴煙なつかし
 大空は茜に燃えて静寂の深谷ほとゝぎす山彦（こだま）して啼く
 尊者いま入定します鬱紺（うづこん）の山河に銀の幕下れり
 天神が焚く黄金の煙ぶらし山河紫金に栄え渡りけり
 しんしんと更くる深山にホトトギス声哀れなり何を告ぐるや
 夜は更けぬ深き山路に弟呼ぶホトトギスの音涙さそひぬ
 弟来たか弟来たかと深山の深夜に呼ばふホトトギス哀れ
 衣ぬぎひさしに懸けて赤裸（あはだか）日に照されて晴るゝ雲見る
 日輝きしぬれ山莊の忙しさよおどるが如し物干す我は
 樹の上に登りつくして瞰はるかす彼方に里あり涙にじむよ
 なつかしき飛驒中原の町よ田よ山の樹上に涙そゝぎぬ
 思はずも昔なじみの里見えぬ健かにあるか老人よ子等よ
 山神の宴（うたげ）の燭光炎ゆるらむ月光に照る山の残雪
 大なる沈黙の世よ月光を浴びて眠れるアルプの群よ
 月光に照る連峯の夢深くほゝゑみ淋し群星声なし
 今日も亦栗鼠樂（りす）しげに遊ぶなり日かけ静かにうつる山の上
 地軸裂け熱火の噴くか霧こむる遙けき山の峽（かい）に雲炎ゆ
 焦熱（さんぜん）の地獄も斯くや濛々と夕の山河紅炎え上る
 燦然（さんぜん）金雨降るらし黄昏の飛驒の山河は炎え栄えゆく
 山谷はすべて黄金に炎え上り黄金の霧に栄え浮きけり

和歌「蝶」 十六首

蝶の来て稽手にとまり憩ひけり可愛し佇み冥想に入る
 冥想する稽手に憩ふ蝶の舌の夢見る如き冷々しさよ
 稽手の上の蝶は恐れず口の辺に手を運べども去らで親しむ
 蝶の止まりし稽手を挙げて静寂の山の樹陰をそぞろ歩きぬ
 瓢々と山莊を訪ふ風寒し蕭々と降る雨中白雲漂ふ
 瓢々と風の音もよし蕭々と雨の音もよし山に安居す
 恐ろしき洪水ありし里信を静かに聞きて山荒れし日を思ふ
 殷々たる雷雨の中に経読めば天神来り和讃するが如し
 雷霆は天かけりゆく閃光に照る山莊は白く小ゆるぐ
 殷々と雷霆横切る圍の中山莊の爐火紅くゆらめく
 訛おかしき鶯の初音聞こえ初めたり四句の山居夏も深みぬ
 耳なれし鶯の声絶えにけり哀れ何づ地を彷徨へるかや
 鶯の声聞き弁きてなづむほど山の独り居過ぎにけるかな
 投げ出せし足に蝶とまりて去らねば引込み得せて爐にあたるあつし
 蝶とまる足さま／＼に動かせど去らで親しむ安位にとくるや
 山莊の朝のどかに蝶の来てひたとまり眉もてあそぶ

和歌「山下の友をばげまして」 八首

旧人は新衆論に力なし新人出でよと世は叫ぶなり
 衆論は紛糾すべしいよ／＼に総ふる力の人を求めむ
 一人にて世は進転すこの一人出でたる世こそ幸下るなり
 勝利とは忍ぶ勇者の偉名なり苦戦は過ぎむ理想は成らむ
 後に君を鞭うつものならめ人なき故に君に位あり
 今昔の感激に笑む時は来む産みの苦しみを忍びたまへよ
 窮まりて総て傷つき狂ひなむ君希くば健かにあれ
 人なくば此の山郷は亡びなむ仰がるゝかな君の雄姿を

和歌「星の花」 十一首

星降りて照り咲く如し山上の梅の黒影仰ぎつくすも
 黒梅の小枝の繁み星とめて銀の花咲く幽明の夜半
 しみ／＼と憧憬にけり燦々と此処彼処に咲く星の花いろ
 澄み渡る山上の星夜の賑はいよ燦々として星降るか今
 限りなき星の群れ照り音もなし無声の霊音きかむ然しぬ
 沈黙の夜はひた更けに更けてゆく群星いよ／＼我が顔に照る
 山居四句蝶も馴れ来て戯むるゝ口にまっはり頬に羽ばたく
 口ひげに止まりし蝶の可愛しけれどこそばゆければ吐き出しにけり
 名も知らぬ珍らしき小鳥訪づれて歌ひ初めけり下山迫るよ
 天業の如き微妙さ小鳥啼く下山迫る日やるせなきかな
 さま／＼の現象知りていよ／＼に生命の光讃めたゝへけり

和歌「花のかほり」 十三首

山上の四句は過ぎぬ古着火に投げすてゝ山を下れり
 会ひ見てのなつかしさとて迎へ来し青年の群のつきぬ歓談
 久しぶり若き友らと山上の高き日仰ぎつ会食すうれし
 青年の群が勇みて山莊をかこめば見る間に解き砕かれつ
 解かれたる山莊の跡見かへれば山ほとゝぎす淋しなき頻く
 おのがじゝ荷を負ひ下る青年の後を追ひつゝ山莊の跡観る
 なつかしく忝けなくもよろこばし祈りさゝげて山に列れぬ
 山の上は清安なりし山の下の事繁しさに涙湧きけり
 み恵の忝けなさに溢れ傷く此の涙もて友うるほさむ
 なつかしみ慕ひ迎ふる少年の群れいぢらしく高草なびく
 変りたる姿仰ぎつ少年等のなつむ真顔をほゝゑみにけり
 里に帰れば老いも若きも溢れたるよろこびをもて迎ふる涙よ
 かばかりに飲こびくるゝ里人の情よ生命の花のかほりよ

和歌「山に祈る」一首

若き日を山に果てなむ子等の盡き御代を祈りて山恋ひにけり

十六 綴り「志らかば」詩歌集



(篠原無然記念館蔵)

詩歌「青年団々歌」

(一) あゝ我が郷土^{ふるさと}

日本無双の山脈わけて

輝き昇る旭日に匂ふ

かまどの煙たなびく十里

山紫に水清く澄む

あゝこれぞ我等がふるさと

我等がふるさと上宝

(二) 我等が修養

春の若草萌え出る如

咲き揃ひたる人の世の花

精神を磨き身体を鍛へ^{からだ}

やがては郷土と皇国を護らん^{さとくに}

あゝこれぞ我等がほまれ

我等が平湯青年団

(三) 風教改善

栄華の仇夢我等望まじ

希ふは神の誠の光

善きをば進め悪しきをくぢき

こもれる人情花と咲かせむ

あゝ家と思ひ郷を思へば

筋骨高鳴り血しほ沸く

(四) 公益開進

青年の意氣漲る限り

微なりといへども力惜しまじ

公益ひろめ世務を扶け

事ある時は令惜しまじ

あゝこれぞ我等が光

日本男子の真精神

詩歌「飛驒青年の叫び」

(一) あゝ偉なるかな飛驒の山

あゝ美なるかな飛驒の溪

あゝ清きかな飛驒の水

(二) 飛驒山脈の打つところ
剛健の意氣漲りて

正義の血しほ沸り湧く

滴るところ仁愛の

(三) 緑に炎ゆる森林の

花芳しく薫るなり

(四) 清泉溢れ湧くところ

(四) 清泉溢れ湧くところ

氣は朗らかに澄み渡り

靈智の光さゆるなり

(五) げに限りなき天恵の

溢るゝ郷に生ひ育つ

飛驒青年の血は躍る

(六) 乱れむとする道のため

枯れなむとする義のために

濁らむとする世のために

(七) 飛驒山郷の任重し

飛驒青年の義は重し

飛驒樂園は夢ならず

(八) 国に献ぐる醇朴の

昔ながらの美俗もて

平安の民たつは今

詩歌「青年の意氣」

(一) 我等青年は此の世の花よ

今に黄金の身を結ぶ

(後半は二唱す)

(二) 我等男子が正しと思や

たとへ死ぬとも退きはせぬ

(三) 我等青年の大禁物は

卑怯未練とハイカラーよ

(四) 御嶽嵐で鍛えた胸に

熱い涙も血もあるよ

(五) 鉄で鍛えた我等が身体

火でも水でも飛び込むよ

(六) おなじ死ぬなら桜の下よ

死ねば屍に花が散る

詩歌「労働の歌」

春は春は桜咲く若菜山 ヤッコラセク

薪木伐る胸に花が散る花が散る

詩歌「飛驒の血のいろ」

夏は夏は風かはる深緑^{ふかみどり} ヤツコラセく
 分ける小膝に白露^{つゆ}が散る玉露^{つゆ}が散る
 秋は秋は黄金沸く田に畑に ヤツコラセく
 録振る腕に明月^{つき}が映す澄月^{つき}がさす
 冬は冬は果てしなき銀世界 ヤツコラセく
 踏み分けるかんじきに白雪^{ゆき}が積む
 深雪^{ゆき}がつむ

(い) 令がけだよジョウダンよしやれ
 ほんにやるならやるように
 (ろ) 六根清浄お山よあれな
 飛驒は山国よいところ
 (は) はづかしいぞへまよいの夢が
 さめて昔があさましや
 (に) 西のみ空の十万億土
 弥陀のみもとがなつかしや
 (ほ) 星の降る宵飛驒路を行けば
 都なまりの鄙唄^{ひな}が
 (へ) 紅をさしたる飛驒女の頬が
 雪の朝は光るぞえ
 (と) どうせ死ぬなら飛驒連峯の
 お花畑で眠りたや
 (ち) 塵の浮世をのがれて来れば
 アルプ嵐がそよそよと
 (り) リンコルンさへ木樵りの子だよ
 頼母しいぞへ飛驒男
 (ぬ) 主のおそばにいらるゝならば

どんな苦勞もいとやせぬ
 (る) 琉璃の流れに淨めた肌を
 穢すまいぞへ飛驒娘
 (き) お城山からアルプス見れば
 雪の姿の気高さよ
 (わ) 若い血しほよ燃えなば燃えろ
 硫黄火の山燃ゆるよう
 (か) かあい泣きやるな苦勞に疲せな
 あなたばかりの身ではない
 (よ) よしや身体は分れていても
 一つ心でくらしたや
 (た) 涙は双六血の氣も凍る
 伝へ説^{かたり}も夢の跡
 (れ) 連理比翼の両面宿難^{すくな}
 鐘がなります千光寺
 (そ) 添うに添はれぬ因縁なれば
 せめて心でびつたりと
 (つ) 月と契りし娘の幸よ
 飛驒の匠^{たくみ}の腕の牙^さえ
 (ね) 願ひ上げます水意^{みなせ}の神へ
 飛驒に波風立たぬよう
 (な) 泣くに泣かれぬ真剣勝負
 我が身いとしや君こひし
 (ら) 樂な生活の夢からさめて
 飛驒が涙にぬれぬよう
 (む) 胸の悩を平湯に流し
 アルプ照る月眺めたや
 (う) 歌に育ちて唄うてくらす
 飛驒は詩の国歌の国

(る) 池は枯れても涙は枯れぬ
左近いとしや孝池水

(の) 残る月影涙をてらす
梅村速水の血の涙

(お) 惜しや梅村いとしや速水

飛驒に男が無かりしか

(く) 雲のお上の一位のはまれ

朝日照りそう位山

(や) 闇の暗さよ飛驒路の闇を

照す光が無いものか

(ま) 誠意こもりし涙の祈願

飛驒の夜中の鐘の音

(け) 袈裟のお色も涙にあせて

飛驒にやつれし嘉念坊

(ふ) ふるい起ちたる焰の子等の

飛驒の夜明けの舞姿

(こ) こもる至情の輝く血しほ

飛驒の男の児の顔の色

(え) 笑みをたゝへし眼の底の

涙万石君見ずや

(て) 天地神明照覧召され

生命こめたる血のざんげ

(あ) 熱い涙がほろほろほろと

何の惜しかろ此の命

(さ) 寒い旅路をゆくかよ工女

無事を勤を祈るぞえ

(き) 汽車にどよめく山郷飛驒よ

基たしかに栄へゆけ

(ゆ) ゆく手さやかに輝く星を

詩歌「郷土の美」

仰ぐ足並揃ふ宵

(め) 目元涼しい笑顔のうれし

跳る希望の胸の唄

(み) 深山こひしい栄華をすてゝ

これが給ひし皇子の胸

(し) 自然ながらの御ふところに

ねむる安けさ山こひし

(ゑ) 絵にも筆にも尽くせぬ飛驒の

山を見せたやこの水を

(ひ) 人の生き甲斐涙の底を

究め尽して笑ひたや

(も) 燃ゆる紅葉に照る山郷の

若き男の子の野の叫び

(せ) 狭い地上に鋤鋤とれど

燃る眼眸は天空へ

(す) 位めば都よ樂園飛驒の

児等が理想は夢ならど

(一) 七重に八重に重りて

吾等が郷をめぐらせる

山は濃みどり淡みどり

(二) さんさんとして聖らかに

吾等が郷をつらぬける

水に球玉の光りあり

(三) げにや此の山此の流れ

気をねり腕を鍛ふべき

清浄無垢の荒行場

(四) よりよき生を拓くべく

高き理想のあこがれに

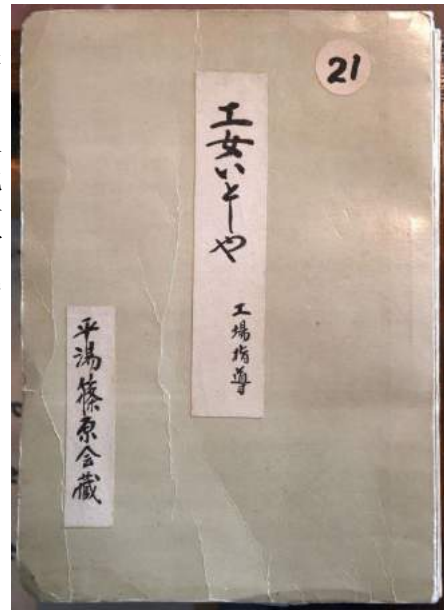
みあかしのごと血は燃る

詩歌「青春経」

あゝ我が夢は今覚めた
人の真似して食うてねて
泣いて笑うて己惚れて
人の真似して死んでゆく
はかない夢と知らないで
生活くらしていたとは情ない
思えば我は人間だ
然も男子で青年だ
我が父母の血をうけて
家の誉ふるさとの花と咲き
我が郷関ふるさとの花と吹き
皇国みくにの花と薫りつゝ
やがては世界の文明の
精華はなと輝く使命もつ
いでや黄金の実を結び
天晴れ一家の戸主となり
宝の郷の公民よ
大日本の国民よ
人の世界の明星と
輝いてこそ甲斐わあれ
此の有為なる身を忘れ
空しい夢に迷わされ
鳥獣とりけだものの真似を為し
婦人に劣る言行し

衰滅近い老人の
真似をすとはあさましや
いかに楽しくあらうとも
いかに美しからうとも
我等を速はせ己惚らせ
狂死くるいなする仇夢と
知つて覚めずに居られよか
あゝ今覚めた我が夢は
力量ちからは足らず若くとも
世の見とほしはつかぬとも
一念こつた人間の
然も男子で青年だ
いかで此の終おめおめと
生甲斐もなく生活くらせよう

十七 綴り「工女いとしや」



(篠原無然記念館蔵)

詩歌「故郷の諸声」
さと もろこえ

(一) 父 さらば行くかよいとしい我が娘

長い勤務の独り旅
必ず心を弛めて呉れな

身は我尽と思ふなよ

(二) 母 子故に迷ふ焼野の雉子

風の朝も雨の夜も

ゆめうつ
夢幻におん身の姿

うつして祈る親心

(三) 兄弟 いとしい姉上我が妹よ

我が家を思はゞ慎みて

夜明けの鐘に夕餉の膳に
ゆうげ

やがて笑顔を見せ給へ

(四) 夫 笑顔も健気に立ちたる妻よ

留守をば案じず離るとも

一ツ心に將來^{すえ}たのしみて

必ず勤務に負けぬよう

(五) 子女 御無事でお勤めなさるか母よ

寝た間も忘れぬ愛児が
いとしいこ

生命をかけて神への祈り

あはれと思し給ふらん

(六) 処女会 ほんに如何^{どう}して居らるゝやと

皆寄る度におん噂

お察^{さつ}しますよ可弱いお胸

せめて音信^{おんしん}で慰めて

(七) 青年 我等^{たのみ}が信頼の優しき花よ

悲しく仇に散らぬよう

汚れに染まぬ貞操^{めいそう}も清く

尊^{えにし}い良縁祈られよ

(八) 戸主、主婦 可弱い女の激しい勤務

心を籠めて焦るなよ

未頼母しい若木が枯れて

此の世に花が咲くものか

(九) 郷土一同 おん身の幸こそ我等が栄え

里の宝よ花よ娘^こよ

山川までも声をば揃^{ととめ}へ

御無事な勤務を祈るぞや

(十) 離れて互に忍ぶはやがて

花咲く春を待つ為よ

人の生き甲斐^{をさけ}女の至情

栄ゆる御代に尽されよ

詩歌「私は紅女」

なまけ

愛は女の命、愛あらば、この歌を心から歌へ

きょうだい

熱い涙の湧くまで、ほんに家の為め、親同胞の心配、教を受けた方々の御恩世間の親切を思へば、心も身体も清く健やかにもてよ。試験によれば、良い歌を好んで歌ふ紅女は、成績も良いそう、よく歌ひ、よく勤めて女ながらも、工場を繁昌させ、御国の富を殖せよ

(1) あはれ父上母上さらば

しばしおひまをたまわれよ

心にかゝるは御身の上よ

御盡事で御暮しなさるよう

(2) 心配なさるな私の事は

たとへお膝を離るとも

朝な夕なにゆめ急らず

慎みはげんでいますゆゑ

(3) 思へば私は弱い少女

世の雨風になれぬ身が

いと我が家を離れて遠く

務めの旅路に出るからは

(4) ほんに心を弛めちやならぬ

一度我が家を出たからは

一足毎に心をくばり

宿の寝起も心して

(5) 見聞く世間の華々しさも

悲しい状も落ついて

静かに心に尋ねた上で

善悪定めて迷うまい

(6) 工場は我等の戦の場よ

戦ふ為に来たからは

勤めの苦勞に負けてはならぬ
女ながらも勇ましく

(7) 苦勞よ積れよなほ此の上に

いかに続くか限りある

我が身の力を試すは今と

思へば身体も奮ひ立つ

(8) 一念こらして工場に出れば

心はどけておもしろく

機械の音も音楽のよう

暑さ寒さも疲れをも

(9) 忘れて心はたゞ一筋に

すぐる小糸に注がれて

たましい宿つて光るか小糸

うれしや揃ふて美しく

(10) 思ひのまゝに上系とつて

長い時間も知らぬ間に

休みの令園が優しく響き

楽しい間に日は暮れる

(11) 夜こそ楽しい我等が塹

明日の戦思はへば

心を静め身体を休め

精力を作らう新しく

(12) 枕に通ふは我が家の夢よ

親兄弟の心配を

思へば弱い女の我が身

慎しみ忘れて居られうか

(13) 食事の注意をゆめ急るな

つまらぬ習俗に染まぬよう

我等は心の美人となつて

詩歌「工女組合の歌」 和楽の歌

(14) 一時の迷ひに心がくらみ
悲しい手傷を負ふたなら
望むは末の幸福よ

父母さまのお歎き如何に
雲る行末いかにせん

(15) あはれ慎しみ心も清く
勤めを励み健康に

一度の音信は二度三度まで
送られ送る樂しさよ

(16) 月日は流るゝ水の如し
今に勤めが明けたなら

待ち焦れたる親子の情
うれし涙に語るのよ

一トヤ、人は相持ち世は人情
我俣つゝしみ助け合ふ

組合うれし

二トヤ、故郷恋しき姉妹
一つに寝起が出来るのよ

組合うれし

三トヤ、見しらぬ世間に出て来ても
氣強く暮せる郷の恩

組合うれし

四トヤ、世馴れぬ可弱い小娘を
信じて手離す親心

組合うれし

五トヤ、何処の工場も良く調べ
選みに選むだ勤めよさ

組合うれし

六トヤ、無益な苦勞に若死を

組合うれし

詩歌「製糸工女のために」 都々逸

出してはならない国のため

七トヤ、仲間の信用高めつゝ
我が身の光を増して行く
組合うれし

八トヤ、病むなよ弱るな墮落すな
腕前みがけと御見舞
組合うれし

九トヤ、工場も栄える国も富む
我が家もお郷も開けゆく
組合うれし

十トヤ、どんなに名案あつたとて
これから始めにや出来はせぬ
組合うれし

一、きりよや姿に迷ふな飛驒女
望むは健なまごころぞ

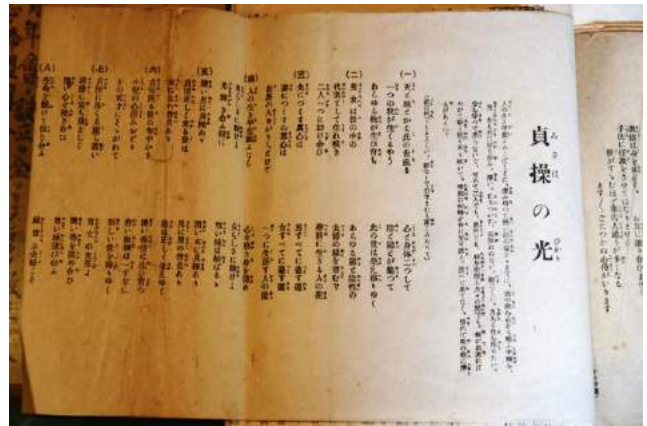
二、女ながらも飛驒山郷の
美化に努めん赤心で

三、日本國中咲かせよ花を
飛驒女が理想の此組合

四、迷ふまいぞへモーコレからは
口先上手の募集員に

五、希望工場の申告するにや
相談かけませう組合へ

十八 綴り「貞操の光」詩歌集



(篠原無然記念館蔵)

詩歌「処女会の歌」

- (一) 私や上室の山里育ち
胸にや愛情の血がもえる
- (二) 峯の松さえ更へない貞操
命かけてもかへられよか
- (三) 稲の穂さへも実のれば下る
女子ゆかしやしとやかに
- (四) 春の風吹きや野山も笑ふ
愛敬うれしやなつかしや
- (五) 蟻でさえする勤儉貯蓄

詩歌「処女の思い出」

- (六) 水は荊の下さえくぐる
無理な苦勞もいとやせぬ

ウラ若ク無邪気ニタノシクラシタ

ムスメ時代ヲ記念スルタメ

- (一) 思へばなつかしや

清き処女の幸せを

笑顔に浮べて歌ひし日

- (二) 日は長く夜はしづか

家業も楽しく身もかろく

苦しさ忘れて学びし日

- (三) 限りなき楽しさに

溢るゝ涙も光あり

こもれる人情を語りし日

- (四) 忘るまじ急たらじ

操の光我が務

心の駒に鞭うちて

詩歌「賤の女の四季」

鄙ビタ草刈リ姿デ舞ヲマウノデス

- (一) 我は賤の女若草の

笑ゆる小里の山隠に

煙たなびく伏屋こそ

我がなつかしき住家をれ

- (二) 岩もる清水にゆあみして

流れを子守の唄ときゝ
紫にはふ霞おば

吸おとめいて少女となりにけり

(三) 春は桜の花隠に

さへずりかはす百鳥を

友にうたひつ蝶と舞ひ

萌ゆる若草つみくらす

(四) 夏はしたゝる緑葉を

渡る朝風友として

肌はだえの汗をあらはせつ

暑さわすれて野にくらす

(五) 秋は千草の露の上に

やどる月影友として

黄金にみのり錦おる

宝とり入れ冬をまつ

(六) 冬は白雪友として

爐端ろばたの団居まどいむつまじく

家業つとめの暇をおしみては

尊き女子の道まなぶ

(七) あはれ此の身はよわくとも

女子のみちをしるからは

清き貞操みさおを命とし

たゞ赤誠まごころをひとすぢに

(八) こもる愛情なさけの花さかせ

人の光をいつまでも

皇国のために家のため

やさしき其の日をおくりなむ

詩歌「人類共存の歌」

(1) 御機嫌よろしう、御機嫌よろしう

御無事でお暮しなさんせ、ほんに
短氣たんきを起しちや、一寸先闇くらよ

死んじや悲しや、果実さは栄かぬ

(2) 生きてゝ呉んりよう、

生きてゝ呉んりよう

涙の中でも、生きてゝ呉んりよう

悲しい時には泣いて泣いて、泣いて

嬉しい時には、笑ひませうよ

(3) 御辛抱なさりよう、御辛抱なさりよう

ジツト堪えて、御辛抱なさりよう

真夜中過ぎたら、東が白む

峠越えれば、麓は直きよ

(4) 許して頂戴、許して頂戴

足らない私を、許して頂戴

胸は火の如ように、燃えては居れど

あまりに小さな、可弱い生身

(5) うれしう御座んす、嬉しうざんす

お頼みますよ、お頼みますえう

御縁が無ければ、会へない婆婆で

お目にかゝるは、御縁で御座る

詩歌「わたしのはゝさま」

わたしの母様お鶴と申してネ

近所隣のうはさを聞けばネ

かあいお鶴さんは十七で嫁入り

十七島田の櫛目が揃ふネ

揃う櫛目がきれいに光るネ

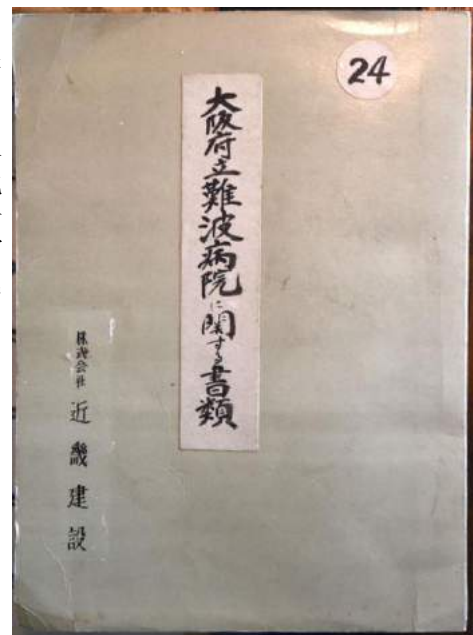
光る姿は桜か雪かネ〜
桜すがたにやベニカネいらぬネ〜
いらぬはずだよ笑顔に笑クボネ〜
エクボ千両口元二千両ネ〜
千両二千両のお金は安いがネ〜
お金で買へないお鶴さんの氣立ネ〜
氣立ゆかしや近所の評判ネ〜
近所女子衆が揃ふてほめりやネ〜
ほめられる程笑顔をそめてネ〜
染めた笑顔に情がこもるネ〜
こもる情が目もとにやどるネ〜
やどる目元に涙がたまるネ〜
たまる涙に小筆を染めてネ〜
小筆すらく お願ひござるネ〜
願上げませうお鶴さんの願
神もさかれませうお鶴さんの願

詩歌「覚悟の歌」

あはれ此の身は弱くとも
女子の道を知るからは
清き貞操^{みさお}を生命とし
ただ真心を一すぢに
毫^{なげ}もる人情の花咲かせ
人間^{ひと}の光を無限^{いっ}までも
御国の為^いに家のため
優しき其の日を送りなむ

十九 綴り「大阪府立難波病院に関する書類」

(中にスケッチと歌及び譜面)



(篠原無然記念館蔵)

詩歌「涙の歌」

一、笑うお方は泣いてた方よ
泣いて曇った胸はらし
二、三味や太鼓は人間どもが
涙かくしになかす音
三、ドンチヤンドンチヤンと言うあの音は
淋しい悲しとなく声よ
四、ブーブーブと自動車が行く
あれも涙の凝った花
五、人に言はれて苦勞にないて
キマリ悪るさに躍り抜く
六、躍り狂ってないてる者を
威張る奴等と憎むなよ

詩歌「涙の歌」

- 一、泣いて仕様が無いならなけよ
なけばなく程氣が晴れる
- 二、泣いて涙の出るまで出して
ひたり暮した染み染みさ
- 三、深い涙の底から浮いて
ほんにニッコリして見たい
- 四、笑うて居たからなき出すのだよ
ないて笑うが此の浮き世
- 五、娑婆で生き甲斐涙の味を
嘗められるだけ嘗めて死のう

詩歌「はすの花よ」

- 一、泥の深味に 咲き出たはすの
色を見やんせ 艶や艶やと
黒い泥にも 染まない姿
なぜにあんなに白いのか
- 二、咲ける筈だよ 彼の根の深さ
艶も出ましよう 根の堅さ
泥も染むまい 彼の肌ならば
だからあんなに白いのよ
- 三、はすの花さえ咲くどろの中
枯れてなろうか 人の娘が
辛抱し通し 肌身をかため
花の咲く春待ちましよう

詩歌「売られた花よ」

- 一、娑婆が厭やなら死んじまえ
いらぬ命は捨てちまえ

とは言うものの不びんな者よ

花の盛りを売られたまままで
実をも結ばず死に切りようか。

二、どうせ（一度は）死ぬ身じやアハテるな

娑婆の見おさめして死ねよ

ほんに真面目な男も知らず

らしい恋さえ知らずに枯れて

心残りが無いものか。

三、泥の中でもはすは咲く

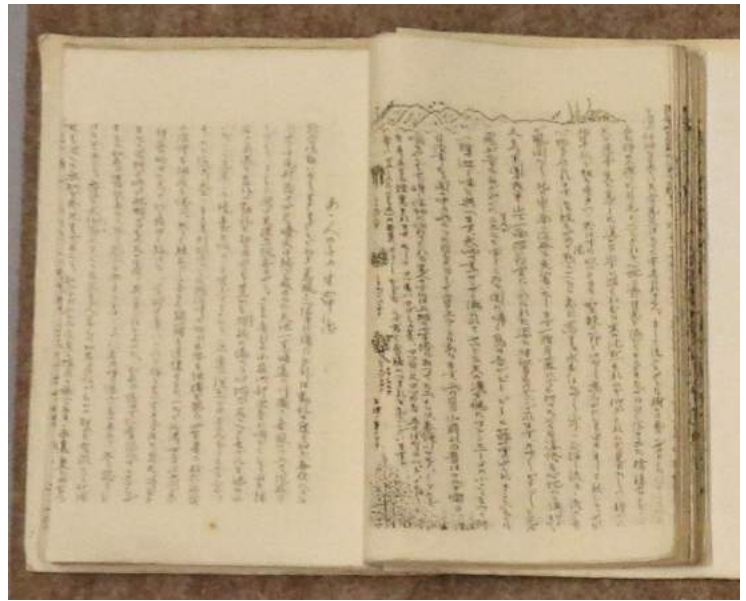
通せ一念咲き通せ

苦界づとめじや覚悟を定めて

ジツと苦勞の味噛みしめて

時の来るのを待つように。

二〇 遺稿「山のおたより」



(篠原無然記念館蔵)

詩歌「新生の歌」

(一) 東のみ空はのぐと

あけ 暁の明星さゑわたり
吹くよ朝風そよくと

(二) 夜半の嵐の音はいづこ

暗の幕は今いづこ
あなよろこばし夜は明た

(三) 炎ゆる黄金の朝日影

光かじやき照りそへば

詩歌「人のこゝろえ」

(四) あゝよろこばし夜は明た
世は歡喜よろこびに満ち渡る

ふるき 旧を清め新なる
あらた

(五) 眠れる花は朝風に
希望を似て夜は明た

やさしいまぶた開きつつ

(六) 悲しい小夜に泣いていた
ほゝゑむ状もかわいらし

よろこび

(七) 野面に引いた朝霧も
玉を連ねて光そふ

里の小道に黄金して
流れも愉快に歌うたふ

(八) あゝよろこばしあゝうれし
心は晴れて雲なく

身は爽かに濁ない

(九) 仰けば限らない希望
思へばおどる胸のうち

奮ひ起たずに居れようか

(十) 生命をかけて我が力
うれしや今ぞ試すのだ

貫き通す巖をも

一トヤ 人をこの世の生きものゝ

かしらと生んで下された

神の恵の有り難や

ニトヤ 深い君と国の思

浪風しらずに日をおくる

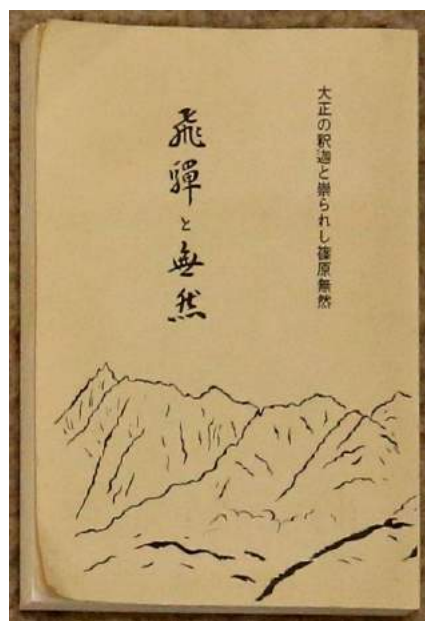
詩歌「数へ歌 農夫の幸福」

三トヤ 身は我がまゝと思ふまい
血をわけ身をすてるまで
育てた親の恩をしれ
四トヤ よしや身体は分れても
兄弟夫婦は一ツ血と
心一つで生活したや
五トヤ いづこの里でつきあふも
みなともだちの因縁と
思ふて情をかけあへよ
六トヤ 無理が出るとも老人の
昔の苦勞を思ひやり
短かい老後なぐさめよ
七トヤ 泣く子供ほどなかけ
知ると知らぬのへだてなく
宝と思ふて育てあげ
八トヤ 役人達をいたわつて
苦勞手数をへらさぬと
此の世は立派に進みやせぬ
九トヤ 心を清め幸福は
この世を送る心がけ
数へる人々うやまへよ
十トヤ 鳥獸とりけだものや草木まで
情をかけてくらすなら
此の世は極樂神の国

一トヤ 人と生れて農業を
励む幸福しあわせ有り難や

二トヤ 深い因果の天理知り
真面目に生活くらす樂しさよ
三トヤ 乱れた世にも花は咲く
自然の生活の安けさよ
四トヤ 克く活動はたらいて克く眠り
衛生すこやか守る健康さ
五トヤ 家は狭くも水入らず
睦む家内の賑はしさ
六トヤ 無益な贅沢思はねば
不自由知らぬ豊かさよ
七トヤ 人情なさけのこもつた郷に位み
笑顔で生活す嬉しさよ
八トヤ 役目や義理を克く守り
揃う人氣の穏やかさ
九トヤ 此の世を養ふ財宝たからをば
作る業務つとめの尊さよ
十トヤ 尊い業務を改良し
郷土さとと皇国くにとを富ときたい

二 遺稿集「飛驒と無然」



(篠原無然記念館蔵)

「人の生き甲斐」

御縁がなければ会えない娑婆で

お目にかゝるは御縁で御座る

もし此の世に苦しみが無くなったら楽しみ
と言う事も無くなる筈だ、そんな淋しい世界
に誰が住むものか

夜があるから昼が楽しいのだ、

寒い冬の後にこそ春風が懐かしい

雨降って地固り天気仰ぐ嬉しさよ、

ほんに泣いて笑うが此浮世なのだ

喜びの花は悲しみの木に咲くものだ

と言う事を片時も忘れないで

悲しみの木を辛抱よく育て上げて

花の咲く日を待つてこそ

真実な人の生き甲斐が味えるのですね

やはらぎ その あるじ

つゝしみて

「人間の花と蜜」

うれしさの余りニッコリと咲く笑顔こそ喜びの花。
仕様なさに思はずも出る苦が笑いこそ悲しみの
花。

この花が咲く程に、胸の曇りが何時とは無しに
晴れてゆく。

そして不思議な涙か眼に宿る。

この涙こそ人間の笑顔の花に染み染みとした情
けの香を添える命のミツですね。

ほんに、熱い涙のミツが湧き通し、笑顔の花が咲
き通す其の日其の日が送れたら、どんなに生き甲
斐がありどんなに此の世が懐かしい事であろう。

「人類共存」

たかの知れた小さい生身で

この果て知れぬ大きな世界に

大勢して暮らして行こうとするのだもの

ほんに並大抵の事ではない

足らない勝ち、過ち通し、なのが人並みなのだ

お互に、おちついて立場を察し合い背一ぱいの苦

勞を負うている者を責めたり突き飛ばしたりしな

いよう お互に我儘を慎み令うて「お察しますす

よ、どうぞよろしく」と助け合い励まし令いましよ

う

「苦勞人」

苦勞人とは、人同様の出来た、人間らしい人と
言うことですね。すなわち酢いも甘いも噛みしめ
て世の味を知り抜いて無理や出駄良目をしない人

なのですね

苦勞あつての楽しみだ、と苦勞の大切な事をのみ込んで、僅かな苦勞に負けたり、泣き言を言ったり、他人に心配をかけたりしない人ですな。

誰にでも出来る事は他人にまかせて置いて、なるだけ他人の出来ない善い事に気を配って下さる方。

この様な苦勞人が多くなればなる程、此の世の中の争いも無くなり、皆が仲よく暮してゆけるのですな。

「娑婆の味」

空腹は一等の料理人だ、と言うようにお腹が空いていれば、どんな物でもおいしく食べられますな。

ほんに不自由を辛抱しましょうよ。

稼いで稼いでお腹をへらしましょうよ。

お漬物がパリパリ噛める味のよさよ、どうか辛抱

づよい人になって、娑婆の苦勞をパリパリと噛んで噛んでかみしめて何時でも又何処へ行つても、

おいしいおいしいと嬉し涙を流して暮せる、甲斐性のある人になりましょう。

性のある人になりましょう。

「アカヌケした人」

ウヌボレたり、自慢したりする人はど、苦勞の足らぬ馬鹿な野暮な人なのですな。

徳のある程、賢い程、好く仕事が出来程、美しい程、物もちになる程、却つてますます足らない

勝ちな我が身に気が附いて、どうして此んな事を他人が褒めたり眼をつけたりするのかと不思議が

る人、他人が褒めたり眼をつけたりするのかと不思議が

「真実の人間学問」

譲り下つて済まない足らない、と真心こめて慎しむ人のアカヌケのした姿はなんというスツキリとした人柄でしょうこんな人がいてくれるからこそ人の思こころが引締り世の中が落着くのですな。

威張つたり他人を馬鹿にしたり我儘を通して勝手に甘い汁を吸うような学問は、地獄の鬼にも劣る悪魔の道だ。

真人間の学問とは、人間らしくなること、他人に迷惑をかけないで、なるだけ大勢が仲よく暮せる道を知ることですな。

「味のある人」

賢い巖の裂け目を涙のようにニジミ出て来る岩清水の味の良さ、水でさえ苦勞した水は様々な天地の精分を溶かし含んでいるうえに練り柔らげられて何とも言えないおいしい和らいだ舌ざはり肌ざはりがあります。

人並すぐれて調子のいい人が初の付きはいいけれどやがて人にあかれ棄てられるのはウヌボレて浮は調子になって、人並の苦勞さえ仕そこなうからですな。

人一倍悲しい目に会うて人の知らない苦勞をしている人がヤケを起さないでヒガマないで、ジツト辛抱しておしてくれたなら、どんなに察しのよい、情の深い辛抱強い、それこそ人の中の人として大勢が慕い寄り兄さん姉さんと頼りにしあう人、人らしい味のある人が出来ることであらう、そ

「姿」

んな人が居てくれる娑婆はどんなに明るく力強く落ついて住み良いことであろう。
 どうせ足らぬがちな失敗だらけな人間同志、苦勞あつてこそ樂しみが味はえる因縁づくな世の中、覺悟を定めて苦勞をなめ通し、苦勞が無ければ物足らない程苦勞好きな張り切った生活がして見たいものですね。

眼をハッキリ開いてアゴを引き、腹に力を篋て足元に氣を附けると、肩が軽く、胸が空き息が深くなり、額、口元、アゴ、ヘリ、足の爪先がまっ直ぐに揃つて全身が球のように統一、天性の美しさのあるスキの無い姿が活々として現われますね。
 眼、鼻、口、掌、足裏を清潔にしてスツキリとなり着物を身輕に引締めて、上半身を震はせぬよう手足で調子を取り、傍見しないで働くと、血の循環がよくなり疲は少く頭は軽く智慧が湧き胸は晴れて情が燃え腹は落着き活き抜く力が出る。

「苦惱の福」

死ぬ身なればこそ生きている事が有難いですね、苦しいのは楽しい味を知っていたからです、苦しみが大きい程大きい理想に燃えている証拠、苦しみが激しい程大きい喜が生れ出る前兆、病の爲に真面目になり、謙下り同情深くなる、泣くは笑う準備、辛い別れは会う嬉しさゆえに衝突し合うてこそ

「お大切に」

折合う加減が分かるのですね、過失を繰返す爲に如何に賢く真面目に成る事か、不自由を知らぬ者には此の味が分るまい、不幸が無いと浮いて計りいて疲れて死ぬでしょう。

深い前世の約束で折角生れ来た此の生命。お互に誰一人として代りの無い勿体なさよ、然も余りに小さな生身をもつて果て知れぬ天地の間に暮して行こうとするお互、粗末に仕合うてはならない。我終しないので助け合いましよう。

独りは淋しく闇は暗い。お互に光り照らし助け合い、眞実ですよ善いですね美しいなあ、と価値を見出し合い励まし合うてこそ、心も勇み疲れも直り、千年も生きたような、晴れ晴れして心残りの無い其日其日が送れるのですね。

「愛の花と歌」

眞実の薨つた姿の、男らしさよ、女らしさよ、男を男らしく女を女らしくする人の姿の花、人知れず泣いて人前では笑顔を見せて頂ける方、慎み深い態度に打たれ、浮いた我身も引締まりゆく情深いおすがたに胸の悩みも溶けてゆ染み染みさ、ジツと堪ていらるるお姿に重荷も下りて終う、「お早う今日は」の挨拶も、なぐさめとなる人の愛の歌、和かに染み染みと胸の辛を撫で合いましようよ、口薨るほど胸につかへ静に話し切る程シミ通る息を吐き切る程懐しい天性の声が響きます。

「真心こめて」

息を静かに細く長く吐き切ると心の底から不思議な光が輝いてまいります、ウヌボレ、ヒガミ、焦り、狼狽、急、自^{なまけ}狂^{やけ}の浅ましい姿が消えてしまいます。

霊火^{たのしいのひ}は眠っている間も理想に向って燃え進み、仕様の悪い事をキツパリあきらめて、自分の境遇、能力、時節とを照し令せて決めた覚悟に一念が奮ってまいります。

そして理想が大きい程「命がけて精一ぱい尽しますそれ以上の事はお頼み致します」と不思議な涙が湧いて手が令されて参ります。

「生き甲斐」

気が咎めず真実が菴る程息が吐き切れるでしよう、息が吐き切れる程頭は軽く胸は晴れ腹が落着き、明るい智恵と燃ゆる愛情と強い意志が与へられ、寒さひだるさも悲しみにも負けないで張切った気持になり、苦しみも悲しみも有難く頂だけて養い分となり、何だか慕しい懐しい涙ぐましい喜びが湧き上り、求めないで唯もう真心が尽し切って見たくて、情をこめて語り我を忘れて働いて克く眠り、目覚めた時は何時も赤児のように若々しくて、言い知れぬ生き甲斐が感じられてまいります。

歌人・高山市名誉市民

牧野英一博士・良三博士兄弟

牧 野 英 一 年 譜

年号	西暦	年齢	経歴
明治 11	1878	0	・大野郡高山町向町(現高山市本町1丁目)の郷宿、玉屋五代目 牧野伊平・やなの長男として出生(3月20日)
14	81	3	・次弟賢二出生
18	85	7	・高山町煥章学校入学 ・末弟良三出生
23	90	12	・斐太尋常中学校予科入学 ・この頃国学者岡村御陰に師事、国学、和歌を学ぶ
28	95	17	・斐太尋常中学校卒業(5月)、第三高等学校入学
29	96	18	・第一高等学校2年に転入
32	99	21	・第一高等学校卒業、東京帝国大学法学科大学入学フランス法科専攻
36	1903	25	・東京帝大首席卒業、司法官試補となり東京帝大講師兼任 ・検事代理・外務省嘱託・東京地裁判事・東京区裁兼地裁検事を歴任
43	10	32	・欧州留学(ベルリン大学リスト教授師事、ローマ大学フェリー教授親交)
大正 2	13	35	・帰国、教授昇進、東京高商(現一橋大学)講師兼任
3	14	36	・法制局参事官兼任、法学博士号を受ける
5	16	38	・主著「日本刑法」初版発行
9	20	42	・弟良三(34歳)が衆議院初当選(5月10日)
14	25	47	・夫人同伴し、東南アジア・インド・中東・欧州・米国の各地歴訪
昭和 6	31	53	・法政大学法学部長兼専門部第一部長を兼任(昭和8.1まで)
11	36	58	・帝国学士院会員選出
13	38	60	・東京帝国大学退官、同学名誉教授推挙、中央大学講師就任(昭和18まで)
17	42	64	・刑法改正仮案が英一指導で起草される
20	45	67	・戦災により自宅焼失、高山市へ疎開のち神奈川県茅ヶ崎町へ転居
21	46	68	・貴族院議員勅撰、憲法制定審議に参画(昭和22.5.3まで)
22	47	69	・中央公職適否審査委員会委員長(昭和23.5.10まで)、以後再び各種政府関係委員歴任
25	50	72	・文化勲章受章(11月3日)
26	51	73	・文化功労者に選ばれ文化功労年金を受ける
27	52	74	・社会教育協会会長就任(昭和45.4.18まで)、東京家庭学園(のち白梅学園短期大学)学長就任
30	55	77	・弟良三が第三次鳩山内閣法務大臣に就任(昭和31.12.20まで)
33	58	80	・新年歌会始の召人を務める(1月10日)
36	61	83	・高山市名誉市民(5月27日)、弟良三逝去(6月1日、76歳)
40	65	87	・勲一等瑞宝章受章(11月3日)
41	66	88	・茅ヶ崎市名誉市民推挙(3月11日)
42	67	89	・最終著作「刑法研究第20巻」発刊
45	70	92	・都内国立第一病院で逝去(4月18日)、従二位に叙され金杯を賜わる、高山市葬執行(5月9日)

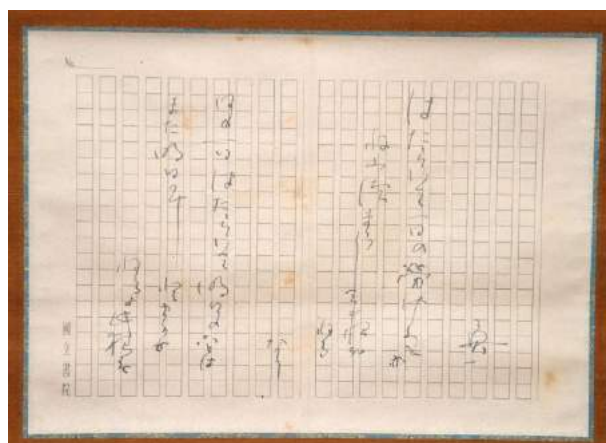
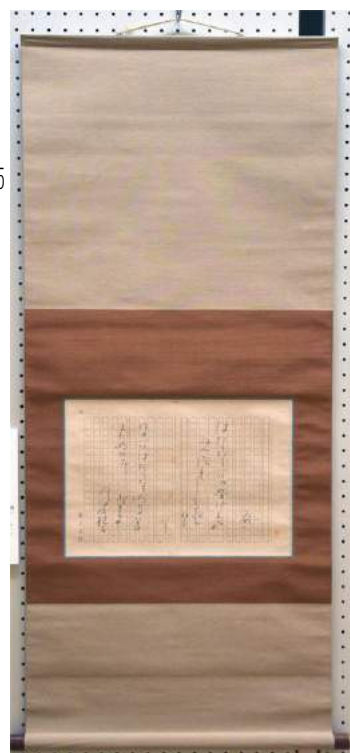
一 肖像画「高山市名誉市民 牧野英一」

(高山市市制記念館蔵
63×54cm)



二 掛軸・原稿用紙「はたらいて・・・英一」

(個人蔵
115×49cm)



英一

はたらいて一日の勞けふも亦
ねぶつまうして夜を

ねる

なり

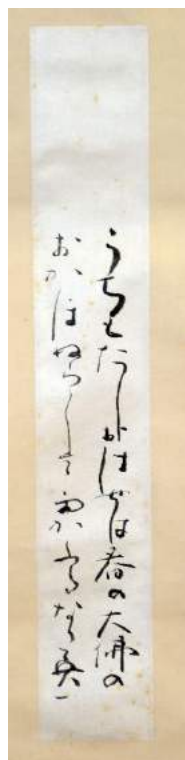
日の一日はたらいて明日のことは
また明日にとまかせ

ねるや此夜は

三 掛軸・短冊「うちもたし・・・英一」



(個人蔵)
134 × 24 cm

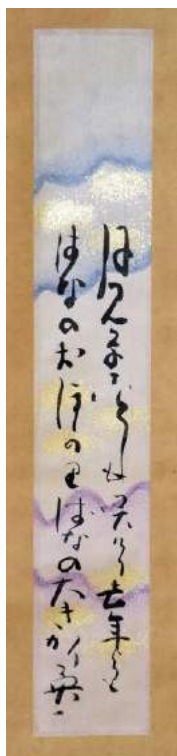


うちもたしおはせは春の大佛の
おかはぬらして雨かふるなり 英一

四 掛軸・短冊「月見草・・・英一」



(個人蔵)
177 × 22 cm



月見草ことしも咲けり去年よりも
はなのおはかりはな的大眼睛 英一

五 掛軸「風とほし・・・英一」



(個人蔵)
194 × 9.5 cm



風とほし五百箇谷々の若葉吹き天つ鞍かねの雪の山吹き 英一

六 掛軸・短冊「しら雲は・・・英一」

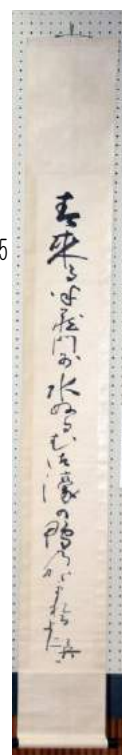


(個人蔵)
153 × 18 cm



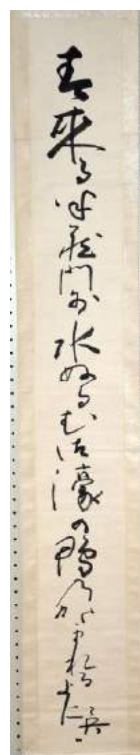
しら雲は
わが庵の上に山にむかう見ゆ 英一
海よりおこり松原の

七 掛軸「春来る・・・英一」

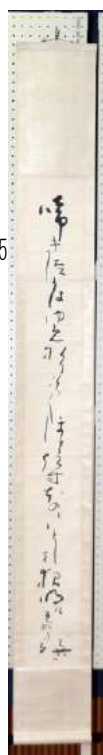


(個人蔵)
190 × 22.5 cm

春来る半蔵門外水ぬるむ 御濠の鴨のかたまれるよに 英一



八 掛軸「啼きつとは・・・英一」



(個人蔵)
190 × 22.5

啼きつとはゆめなりけらしほととぎすほのぼのとして夜明け



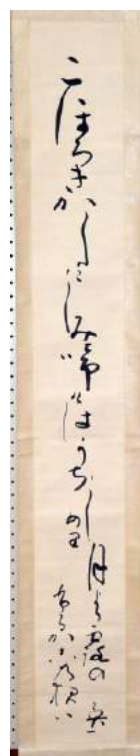
英一
そめたる

九 掛軸「こほろきが・・・英一」



(個人蔵)
190 × 22.5

こほろきがしみじみ啼けばうちしめり



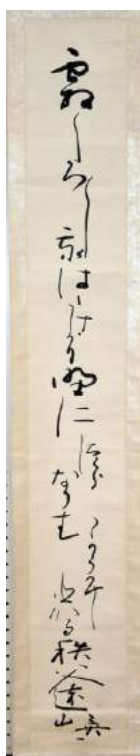
月より露の 英一
ふるかこの夜は

十 掛軸「霜しろし・・・英一」



(個人蔵)
190 × 22.5

霜しろし我はたけに野につらならむむかうに



光る秩父遠山 英一

十一 掛軸「すゞかけの・・・英一」



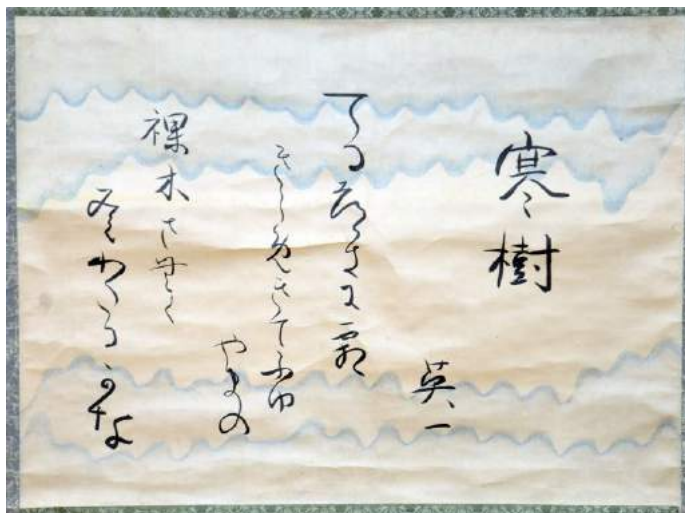
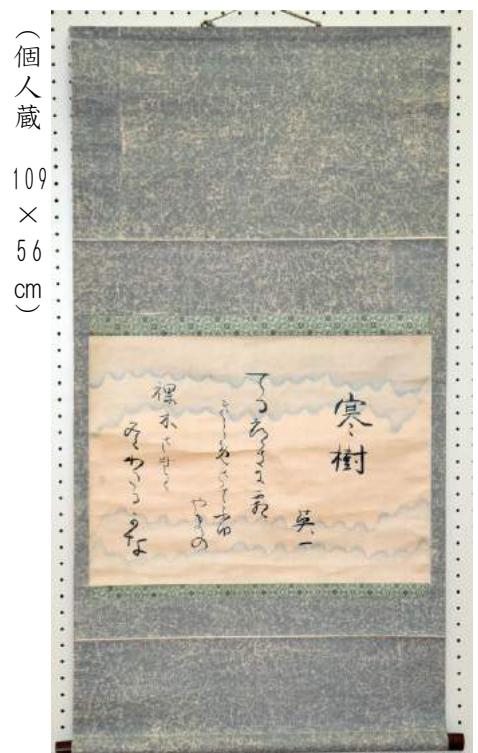
すゞかけの林の一つにいつか来て春らしき鳥の二つ並ぶる 英一

十二 掛軸「みちはたの・・・英一」



みちはたの溝のなかれのさらさらにわすれめや昔鮒とりし所 英一

十三 掛軸「寒樹・・・英一」



寒樹

英一

てるつきに霜

さらめきてふゆ

やまの

裸木さむく

みえわたるかな

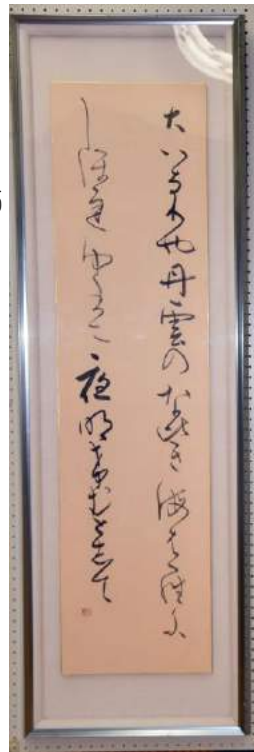
十四 額装「早しほの・・・英一」



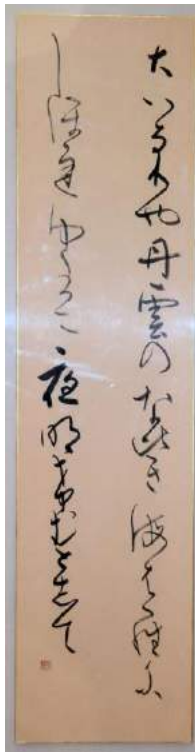
(斐太高校蔵 160×25 cm)

早しほのせとのなかれに声をけてかり鳴きわたるとは鳴わたる 英一

十五 額装・書「大いなりや 英一」



(書・複製 165×50 cm) ※宮中歌会始の召人の歌



大いなりや丹雲のなびき海ばらに
しほじ豊かに夜明けむとして

十六 森 宛て書状 (受賞の喜びを歌っている)



(個人蔵)

尚々令国へよろしく
申上下され度 荊妻よりも
よろしくと申出ました
肅啓早速御啓
篤の御祝辞に預り
千々お鳴謝申上ます。延引
ながら御礼申上ます。幸に
式には参内するを得まし
たが、その前後から被感の
気味で、終に本物になり
ました次第、漸く兩三日前
から離床いたしました。
平素の御厚情此際
格別に感謝申上度、延
引お詫言御礼申上
ます
拝具

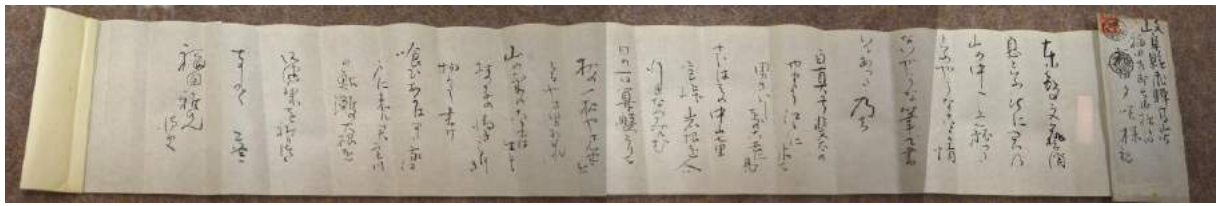
十二月廿九日

英一

森 学兄
侍史

いさをしる受けつつ
位かゆちゝのみの父おは
さばと母がまさばと
いさをしるおしいただきて
人々ゆうけしたる父の
なさけおもはば
いさをしるしうなごにかけ
てかしこしわれ見るは
もみぢの大宮所
いさをしるしたび来て
かけて我まづ舞ふ 妻も
まふ嫁も孫どももまふ
いさをしるし紫綬の
にはへるをかけて
立ちみつ
またすわり見つ

十七 福田夕咲宛て書状（文芸誌の記事から、歌を詠んでいる）

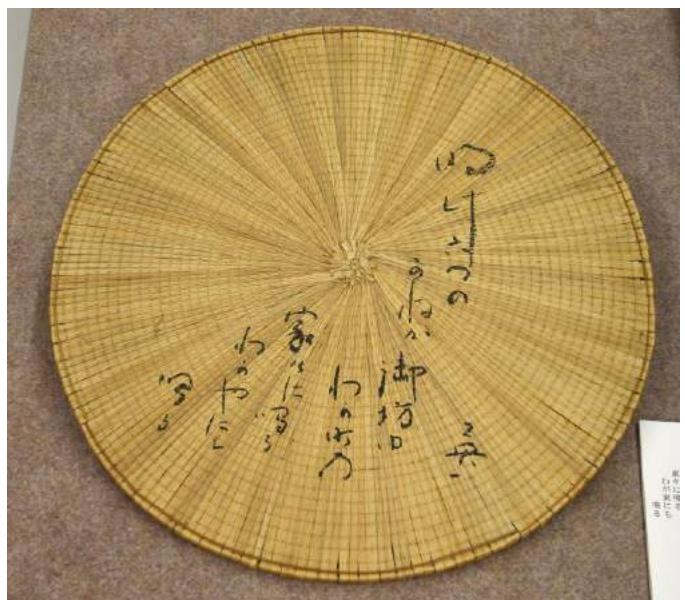


（個人蔵）

東都文芸消

息といふ所に君の
山の中へ立籠った
といふやうなことが情
ないやうな筆で書
いてあつたのは
白真弓雙太の
やまより江戸に来て
男さひしき
をのこ去に鳧
さらはその中山七里
宮崎 岩根を人は
行きなつみけむ
日の一日算盤とりて
夜の一夜 やさ筆を
とる やさ男あはれ
山の気のさりては生るる
村の子の情けうるはしき
物かたり書け
喰ひあうはまた我江
戸に来れ君宮川
の鮎灘の大根を
御健康を祈りつつ
七月九日
福田雅兄
侍史
英一

十八 一文字笠「明け六の・・・英一」



（個人蔵）

明け六の
かねが御坊ゆ
わが町の
家々に鳴る
わが家にも
鳴る
英一

十九 額装・一文字笠「谷々を・・・英一」



(斐太高校蔵)

谷々をとほく

わけ来て

秋の水

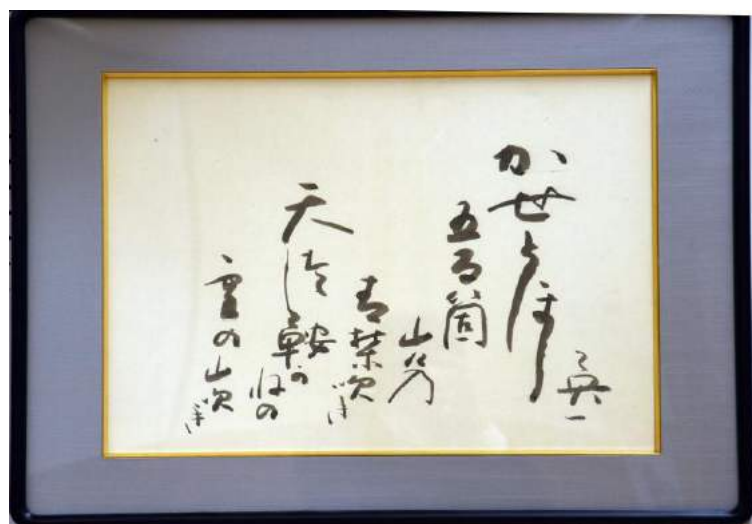
この村をも

行きてとまら

ず

英一

二〇 額装「かせとほし・・・英一」



(斐太高校蔵 70×56 cm)

かせとほし

英一

五百箇

山々の

青景吹

天津鞍か

ねの

雪の山吹

き

二 歌碑・写真「かせとほし・・・英一」



(斐太高校校庭)

かせとほし 英一
 五百箇 山々乃
 青景吹 き
 天津鞍か
 ねの
 雪の山吹き

二 扇子「仁遠からんや 英一」



(東小学校蔵)

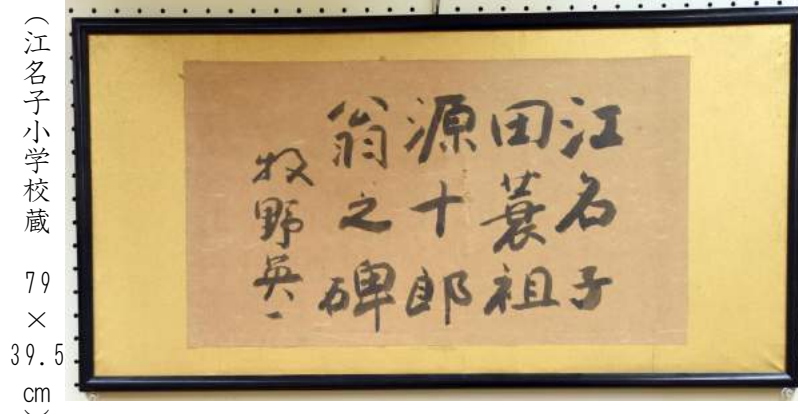
二 扁額「仁遠からんや 英一」



(東小学校蔵)

92.5
 ×
 47.5
 cm

二四 扁額「江名子田蓑祖源十郎翁之碑 牧野英一」



(江名子小学校蔵
79×39.5
cm)

二五 歌碑・写真「江名子田蓑祖源十郎翁之碑 牧野英一」

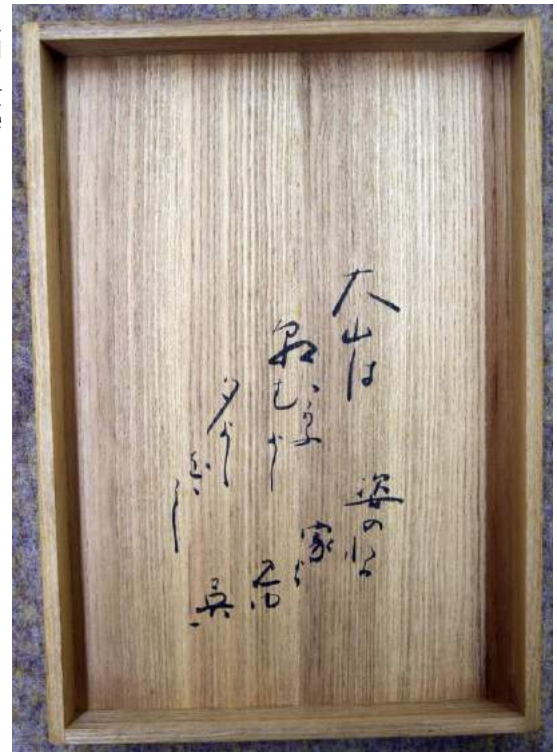


(江名子神社近く)

江名子
田蓑祖
源十郎
翁之碑
牧野英一

久方の雨のふる日も田蓑きて民の
たつきの急りぞなき
蓑つくる業を教へてなりはひをた
すけし人の恵をそおもふ

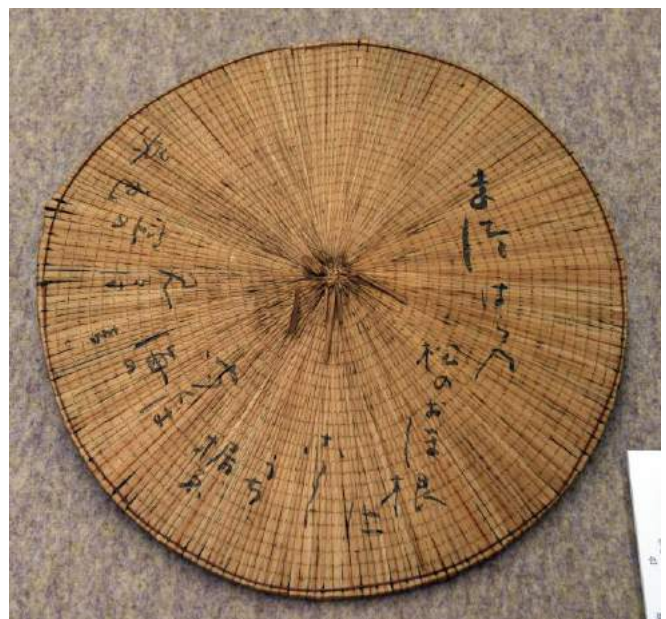
二六 箱書「表書 折々廻歌」



(個人蔵)

大山は 姿のわか
朝むかふよし 家より
夕よし 見ゆ
をし 英一

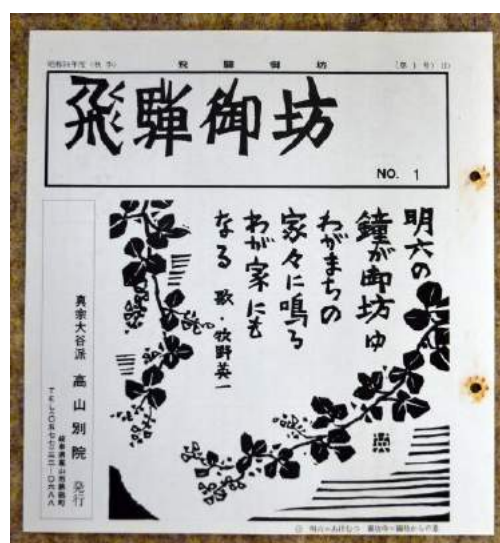
二七 「文字笠」まつはらの・・・英一」



(個人蔵)

まつはらの
松のおほ根に
こし
うち 据え
聞くは 海の
ね 見るは 空の
色 英一

二八 版画「明け六の……牧野英一」



(飛驒御坊より)

二九 版画「枕の下……牧野英一」



(飛驒御坊より)

三〇 版画「何故のこと……牧野英一」



(飛驒御坊より)

三一 和本『松室岡』 牧野英一稿大秀伝記



(飛驒高山まちの博物館蔵)

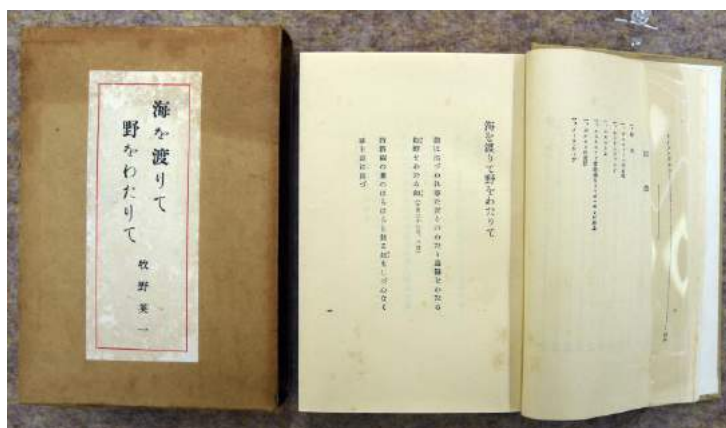
三三 冊子「牧野英一歌集」

(飛騨高山まちの博物館蔵)



三三 冊子「海を渡りて 野を渡りて」

(飛騨高山まちの博物館蔵)

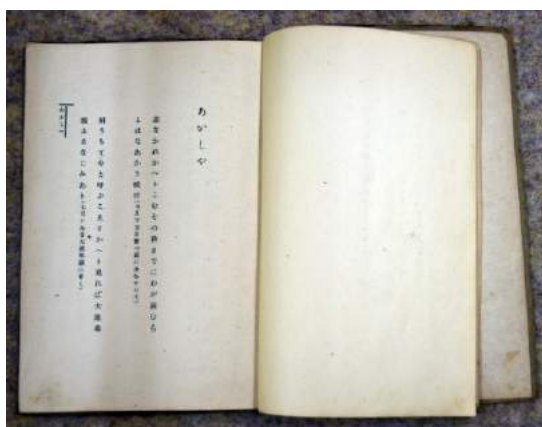


三四 冊子「飛騨短歌」



(飛騨高山まちの博物館蔵)

三五 冊子「あかしや」



(飛騨高山まちの博物館蔵)

三六 冊子「小葦集」



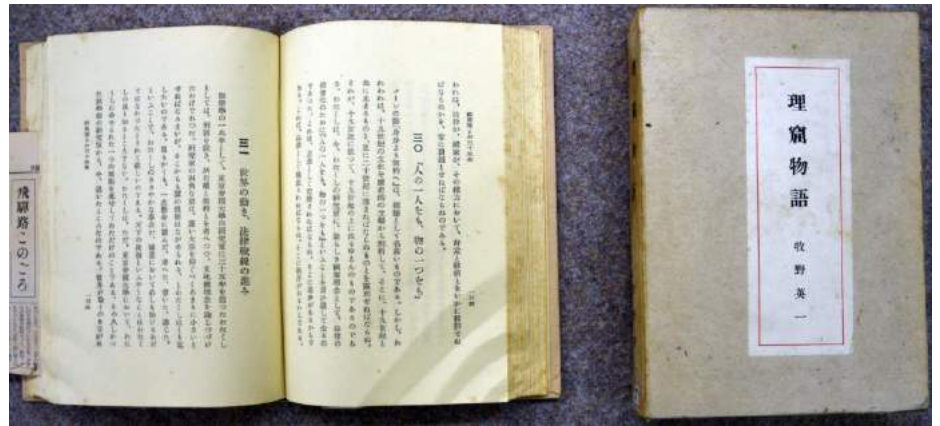
(飛騨高山まちの博物館蔵)

三七 冊子「パンテオンの人人」

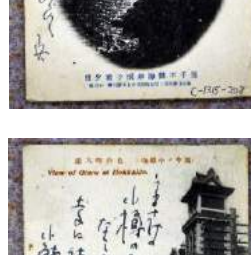


(飛騨高山まちの博物館蔵)

(飛騨高山まちの博物館蔵)



(飛騨高山まちの博物館蔵)



四〇 写真「牧野英一・良三兄弟」

(斐太高校蔵)



牧 野 良 三 年 譜

年号	西暦	年齢	経歴
明治 18	1885	0	・大野郡高山町向町(現高山市本町 1 丁目)の郷宿、玉屋五代目 牧野伊平・やなの 4 男(末弟)として出生(5 月 26 日)
35	1902	17	・斐太尋常中学校卒業
38	05	20	・山口高等学校卒業
44	11	26	・東京帝国大学法科大学独逸法律学科卒業、文官高等試験合格、通信省(現総務省)入省
大正 3	14	28	・大阪商船 kk 入社
5	16	30	・弁護士名簿登録
7	18	32	・文部大臣秘書官
9	20	34	・衆議院議員に当選(政友会)、以後連続 8 回当選
昭和 21	46	60	・公職より追放
25	50	65	・公職追放を解除、日本自由党顧問、全国選挙管理委員会委員長
26	51	66	・選挙制度調査会会長
27	52	67	・衆議院議員当選、当選 9 回
28	53	68	・選挙制度調査会会長
29	54	69	・日本民主党創立委員、東北大学より法学博士の学位を受く、学位論文「競争入札と談合」
30	55	70	・衆議院議員当選、当選 10 回、鳩山内閣 法務大臣に就任
36	61	76	・高山市名誉市民推挙(5 月 27 日)、自宅にて逝去(6 月 1 日)、正三位勲一等旭日大綬章、高山市葬執行(6 月 10 日)

四一 肖像画「高山市名誉市民 牧野良三」

(高山市市制記念館蔵
54×63
cm)



四二 扁額「青松壽色多 飛州」

(斐太高校蔵
48×90
cm)



四三 掛軸「みなかみに・・・良三」



(個人蔵)
145 × 65 cm

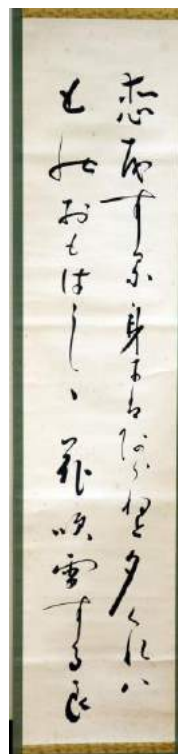


みなかみに
かすみた まふ
神通川
青葉も
鮎の
きそひ
のぼるも
良三

四四 掛軸「恋をする・・・良」



(個人蔵)
200 × 31 cm



恋をする身にはあらねと夕くれは
ものおもはしく花吹雪する
良

四五 掛軸「たまくしけ・・・良」

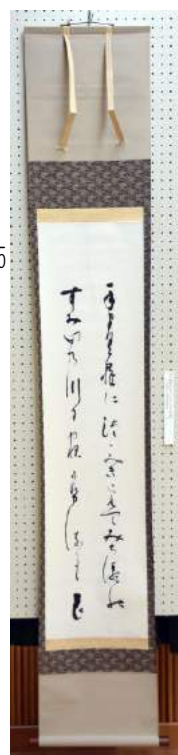


(個人蔵)
184 × 32 cm



たまくしけ函根のやまのなてかたの
かけに相模の碧海を見る
良

四六 掛軸「手まくらに・・・良」



(個人蔵)
208 × 34.5 cm

手まくらにつゝみきこえてみち潮の
すみ田の川に夜かせ流るる 良

四七 掛軸「なまぬるき・・・良三」



(個人蔵)
193 × 45 cm

なまぬるき大阪のかせあめとなりて
酔ひなからきぬ京の圓山 良三

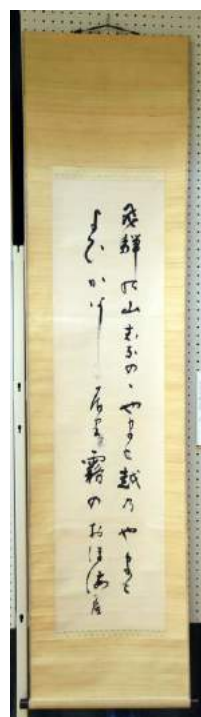
四八 掛軸「えんかわに・・・良」



(個人蔵)
178 × 44 cm

えんかわにすはれは椽のぬくもりか
身にしみじみとあたたかき秋 良

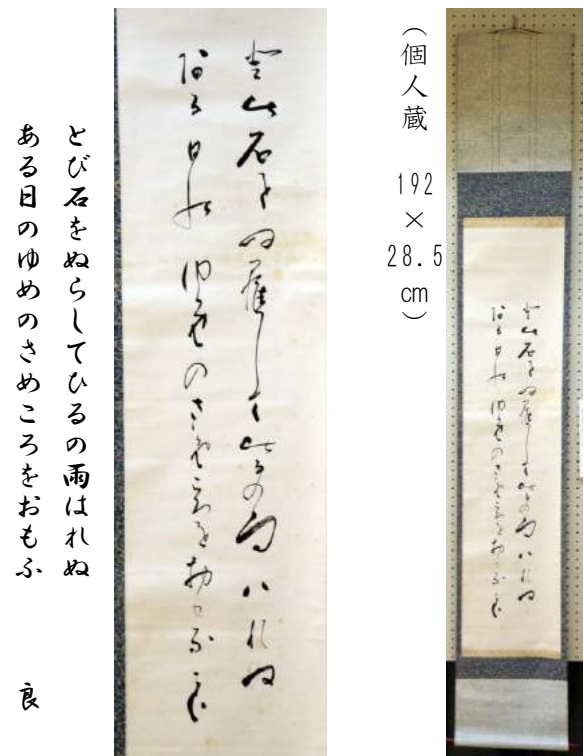
四九 掛軸「飛驒の山・・・良三」



(個人蔵)
193 × 46 cm

飛驒の山しなのやまも越のやまも
よひかはし居り霧のおほ海 良三

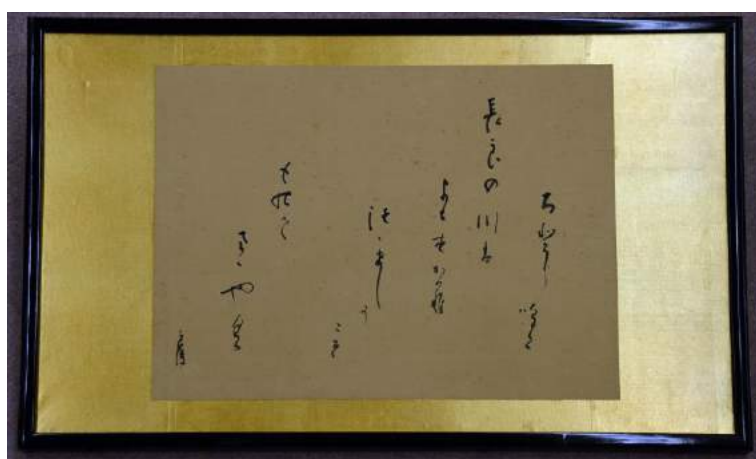
五〇 掛軸「とび石を・・・良」



五一 掛軸「とりたて・・・良三」



五二 扁額「ちとり鳴く・・・良三」



(個人蔵)

ちとり鳴く
 長良の川は
 よもすがら
 津つましゅう
 こそ
 ものを
 ささやく
 良三

五三 掛軸・扇面「く羅ゐ山・・・良」

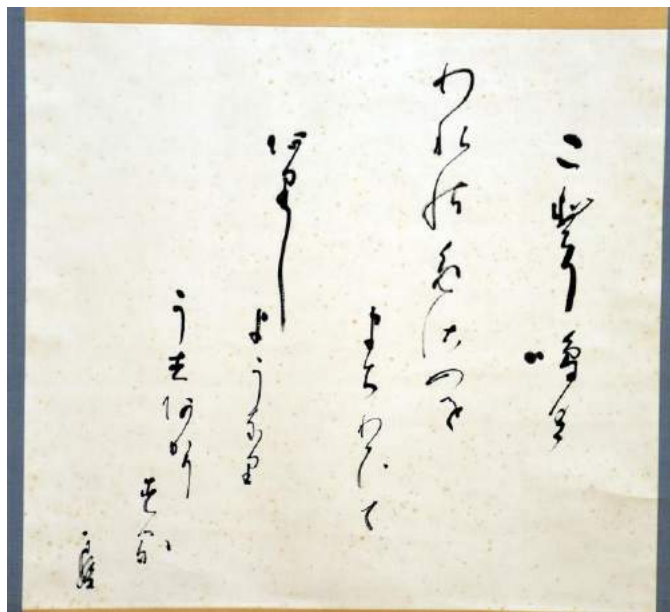


く羅ゐ山
 一位わか葉の
 あさ露の
 落ちて
 ながれて
 鮎と
 なる
 ころ
 良

(個人蔵)
 110 ×
 57.5
 cm)



五四 掛軸「小とり鳴く・・・良三」



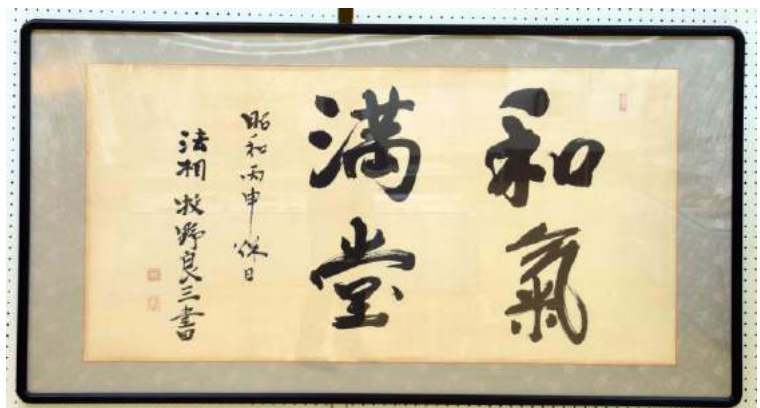
(個人蔵
139 × 61 cm)



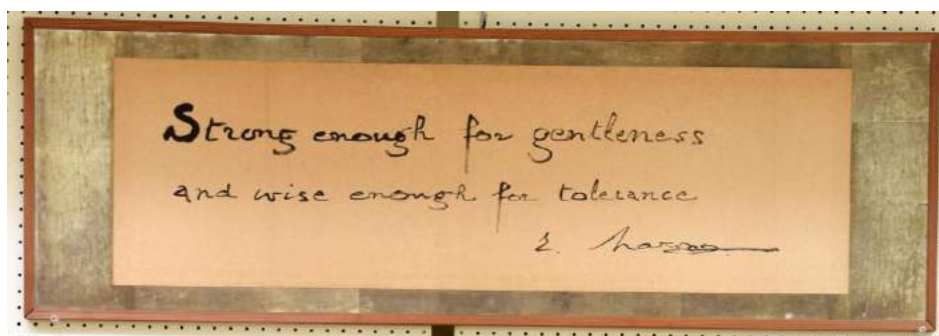
小とり鳴く
われのめさめを
まちわびて
ありし
ようなり
うすあかり
する
良三

五五 「和氣満堂」 昭和丙申 法相 牧野良三書

(斐太高校蔵
87 × 168 cm)



(個人蔵)
46 ×
139
cm)



Strong enough for gentleness and wise enough for tolerance.
R Makino

「優しさは最大の強さであり 寛容は最大の賢さである」

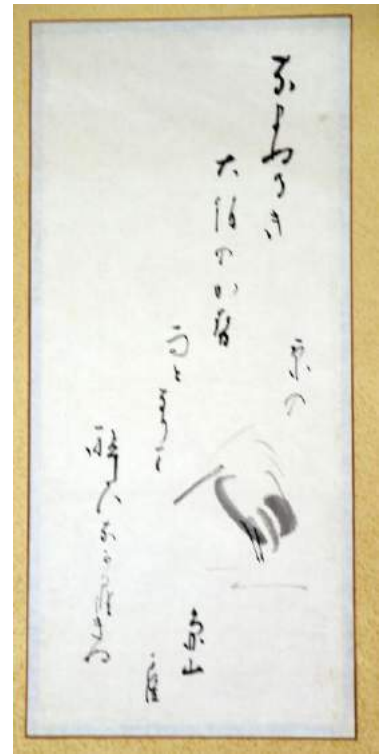


(高山市文化協会が設置)

(個人蔵)



五八 屏風貼・書「なまぬるき・・・良三」



なまぬるき

京の

大阪のかせ

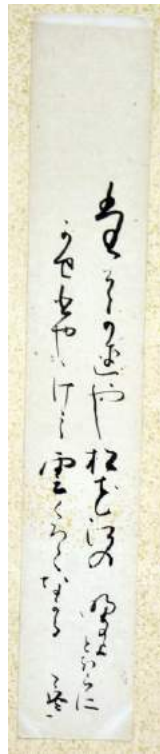
圓山

雨となりて

良三

酔ひなからきぬ

五九 屏風貼・短冊「たそがれや・・・英一」



たそがれや松を□□□□□□□□

かぜそややけし雲くろくなかる 英一

六〇 屏風貼・短冊「朝萩 きぬきぬの・・・純男」



朝萩

きぬきぬのわかれをたれにおしみてか
霜にしをるゝ萩のはな妻 純男

(※純男は、若き日の牧野英一の雅号)

六一 屏風貼・扇面「美しめ・・・英一」



美しめ縄

くちてかかれる

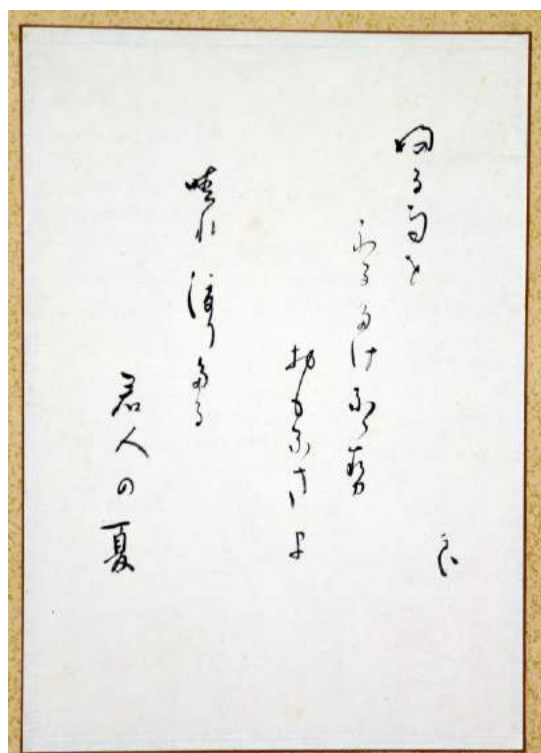
野の中の

とりぬのかけに

うくいすの鳴

英一

六二 屏風貼・書「ふる雨を・・・良三」



ふる雨を
ふるたけふらせ
おもふさま
晴れ渡りたる
若人の夏

良

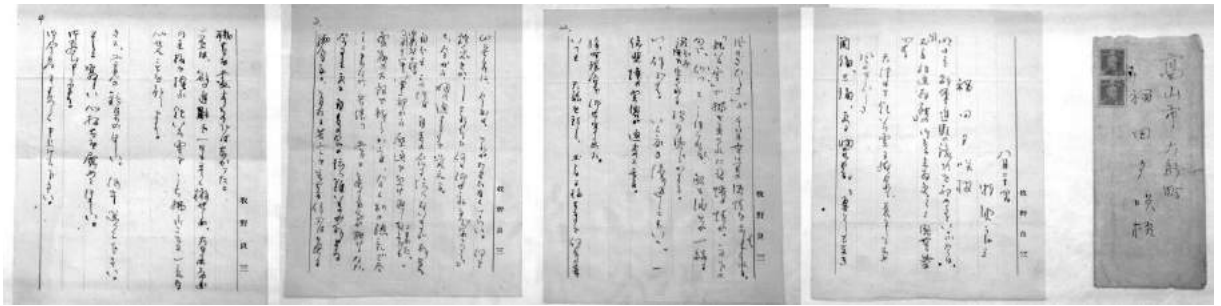
六三 一文字笠「しつとりと・・・良三」



(個人蔵)

しつとりと
つちうるほひて
このあさけ
人のたよりを
まつここの地
する
良三

六四 福田夕咲宛て書状



八月二十四日

牧野良三

福田夕咲様

明日から敵軍進駐の豫行を初めるといふ今日、
『玉音放送拝聴』の御葉書拝受して感無量
です。

天津日と鈍いろ雲に掩われて、夏とてもなき

風のさびしさ

両論、三論、更に、胸がせまる。「夏とてもなき

風のさびしさ」が千いま無量の感情を示す、

「鈍いろ雲」で描き出された悲憤の情が、この下の

句で、ぐっとしぼられて、血と涙とが一緒に

滲じみ出される様な感じがする。

いい作です。いく度き繰り返してもいい。

位悲憤の実感が迫まって居る

臨時議會を仰せ出された。

いつも、天顔を拝し、玉音に接するのを何分の喜

びとするのに、今度は、それがたまらなくつらい。何と

詫ぶべきか、．．．それよりも何と仰せられるであろうか

と今から胸の迫るのを覚える。

自分もこの頃は 自責の念に堪へないものがあります。

御□□の様に

この十年軍部から圧迫を受け通して来た、

宣戦の大詔を拝してから、全く別の熱意で尽

して来たが、矢張り 吾々は眞の勇気が欠けてゐた。

今にして更に 自責の念の堪へ難いものがあります。

議會毎に、首相に苦言を呈する位では眞に

職責を尽すものではなかつた。

この上は、敵の進駐を一日も早く撤せしめ、大日本帝国

の主権を掩ふ 鈍いろ雲を うち拂ふことに一意専

心せんことを約します。

さて、学兄の歌集がほしい。何卒送って下さい。

そして 寂しい心持ちを慰めてほしい。

御願ひ申します。

御令兄によりしく申上げて下さい。

(個人蔵)

高山市近代文学館調査・研究報告書

平成二十八年三月発行

編集 一般社団法人高山市文化協会
